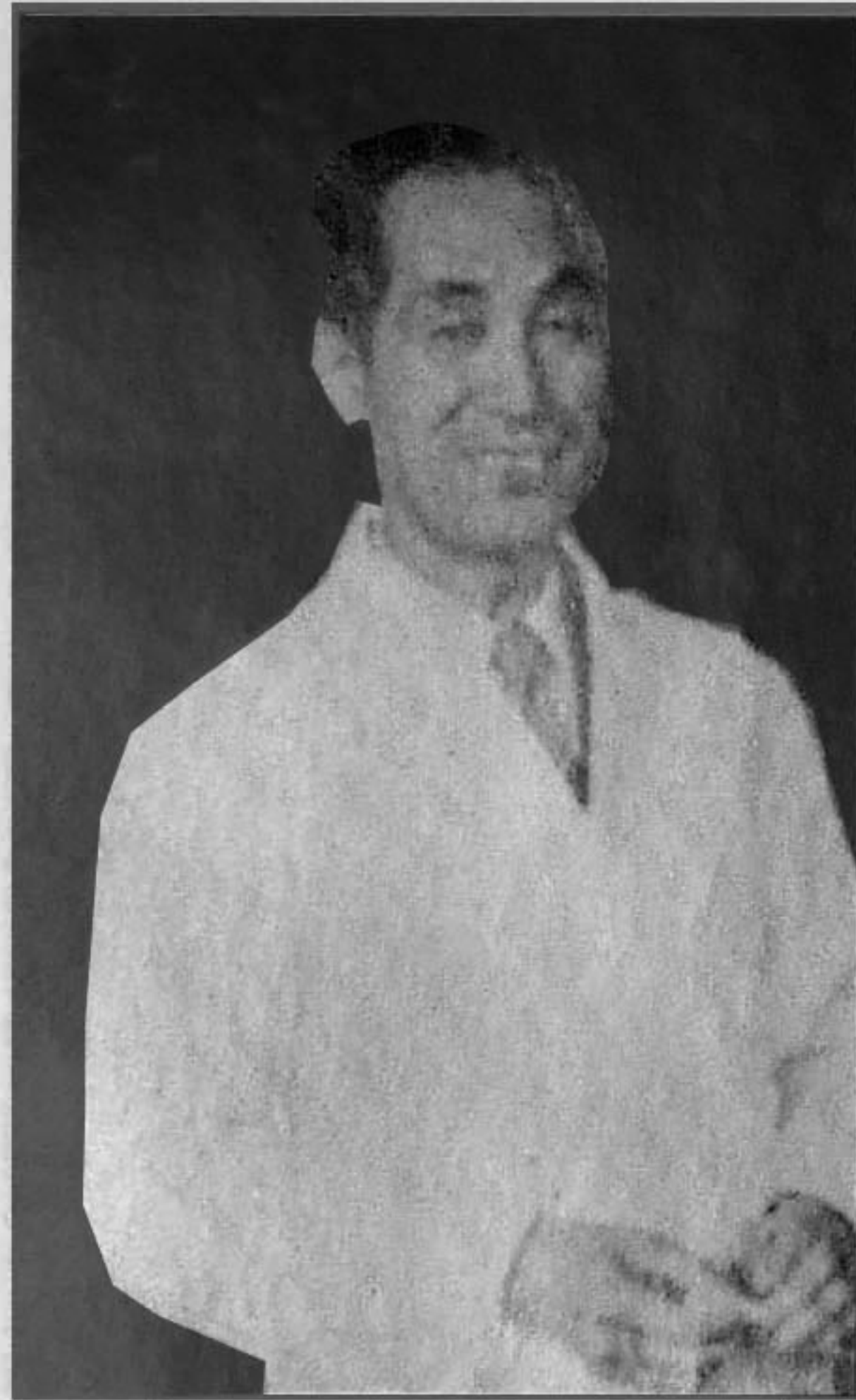


柴田 治先生——生涯・語録・思い出——

昭和六十二年九月

東京都立戸山高等学校  
昭和三十一年卒業生組



昭和31年頃の柴田 治先生



昭和55年クラス会にて

## はしがき

東京府立第四中学校、その後身の東京都立戸山高等学校で、三十六年にわたり教鞭をとられた柴田治先生がこの世を去られたのは、昭和六十年四月三日であった。薫陶を受けた者達にとってその痛手は大きく、一つの時代が終ったかのようにさえ思われた。

しかし、その教えは今なお皆の心に生き続けており、何かにつけてそこへ立ち戻る原点となっている。われわれは昭和三十一年三月に戸山高校を卒業したものであるが、故柴田先生に高校三年時のクラス担任をしていただいた。先生最後の担任クラスである。先生は精魂込めてわれわれを鍛えて下さったが、われわれは不肖の教え子という一語に尽きる。

思えば丁度、先生の八十九才の誕生日にクラス会を開こうと相談をしていた矢先の訃報であった。やむなく六月に先生無きクラス会を開き、お墓参りをさせていただいた。先生の教えを改めて記し、先生の思い出をまとめようとの話が出たのはその時のことである。

編集委員会もつくられ、準備を始めなければならなかったにもかかわらず、茫然自失、一年後によく動き出すといった始末であった。その後、幾度となくお宅に伺い、御遺族の皆様にはひとかたならぬご迷惑をおかけした。年譜作成をはじめとし、貴重な資料をお貸し下さったり、お話を聞かせて下さった御遺族の皆様には、衷心より感謝申し上げます。

次第である。

われわれは先生の教えを心に刻むべく、先生のお話の一端をここに収めさせていただいた。そのことをお許し下さった御遺族の皆様にご改めて御礼を申し上げます。また、われわれのわがままな願いをお聞き届け下さり、「憶い出すままに」を公開して下さい下さった奥様には、何と御礼を申し上げてよいかわからない。

この追悼誌が、先生の教えを受けた卒業生にとって、改めて先生の教えを確かめる縁ともなれば、われわれにとっても望外の喜びである。しかし、不肖の教え子故の不備、不足も数多く、礼を失しているところも多いにちがいない。生前の先生に何の恩返しも出来なかつた数え子達の、せめてもの供養ということで御海容いただければさいわいである。

昭和六十二年四月三日

柴田 治先生の三回忌に。

東京都立戸山高等学校昭和三十一年卒業H組

「柴田 治先生 ―生涯・語録・思い出―」編集委員会

目

次

はしがき

目次

第一部 柴田治先生の生涯	1
一、出生	2
二、三江小学校の頃	4
三、開成中学の頃	6
四、物理学校へ	11
五、四中・戸山三十六年	13
(一)、戦前期・四中時代	13
(二)、戦後期・戸山高校時代	16
六、武蔵工大付属高・晩年	21
第二部 特別寄稿「憶い出すままに」(柴田 春子)	25
第三部 柴田治先生語録	37
一、今日の日本	39

二、小・中・高等学校	40
三、高校三ヶ年	41
四、年輪と浪人と	42
五、根性のある人	43
六、謙虚と素直	44
七、大名的な生活	45
八、実力を身につける	46
九、朝早く起きる	48
十、早寝早起	50
十一、速達の便	52
十二、夜の散歩	54
十三、日曜日	55
十四、勉強法	56
(一)、数学の勉強法	56
(二)、英語の勉強法	58
(三)、国語の勉強法	61

四、社会・理科の勉強法	61
第四部 柴田治先生の思い出——戸山高校昭和三十一年卒——	63
第五部 柴田治先生年譜	123
資料・録音テープ一覧	128
編集後記	129

第一部 柴田治先生の生涯

第一部 柴田 治先生の生涯

一、出 生

柴田治先生は、明治二十九年（一八九六年）、東京・浅草に生まれた。生家は金子姓で、新潟・三日市の柳沢藩家老の家柄である。柳沢吉保の三男・時睦ときちかを祖とする三日市の柳沢家（一万石）は、浅草に居をかまえており、その地続きに金子家があった。先生が生まれた頃は、実父・金子親成氏が藩校の流れを汲む私立三江さんこう小学校を経営していた。兄弟は七人で、先生は第六子（四男）であった。

（先生談）「生まれは、今、台東区とっておりますが、浅草で生まれまして、当時は本を読むのに電燈などはありませんで、ランプでございました。ランプになりますと、これは必ず誰か掃除をしなければならん……大体掃除をしたりすることは、兄弟の中の下の方の割合仕様がないう者が仰せ付かるもんですから、手が黒くなりますし、いやなもので……。下から二番目でございます。一番下のは一番下だというので、どこからも大変ほめられていたようですが、下から二番目ですとそんなことといってたら生活になりませんから、闘争心誠に旺盛である（笑）、ということ、ま、にくまれっ子だったろうと想像いたします。

祖父は越後・三日市の小さい藩の奉行をやっていたんだということを、父が亡くなりましてから、大変お世話になりました」といって札幌の奥田病院をこしらえた当時八十位の方が、私共のところへみえまして、「あの祖父さんて方は非常に偉かったんだ」という、こういう話でございました。ピンとこない話でございます。

父の方は刀の方が少し遣えたようでございます。私の小学校・一年か二年位の時に、エーお仲間の三人の遣い手と一緒に真剣の型をやりまして、火花の散るところの模様が未だに目に残っております。ああいうものは、その後見たことがございませんでした。

エー生まれが浅草で、親父が頑固で……上の兄貴三人は、皆仕事が違うんでございまして、一番上の兄貴は陸軍の法務官をやっております、その次は農地水利の方で農商務省（農林省）に出しております、その次は士官学校の教官をやっております。それから弟の方は早稲田でフランス語をやったんでございますが、これは四十位の時に亡くなってしまいました。姉の方はもう少し前に亡くなりました。」（昭和四十二年四月十五日、「古稀を祝う集い」にて）



## 二、三江小学校の頃

明治三十六年（一九〇三年）四月、先生は生家・金子家が経営する私立三江尋常・高等小学校に入学した。三江小学校については、同校卒業生の一人で日本ゴム協会会長となつた樋口桜五氏が次のように述べている。

「丁度新劇の大寺学校のような典型的な私学で、越前の小藩、殿様子爵柳沢徳忠さんの邸つづきに、僅か四教室の二階建、金子さんという御家老が校主であった。

義務教育が六年に延長されたのが明治四〇年なので、まだ尋常科が四年、高等科が四年の頃で、高等二年修業者には中学校の入学資格があった。（中略）

このころ下町の子供たちは小学校だけで足りりとし、中学や商業校への進学はおろか、高等科をさえ満足に卒業する者が少なかった時代なので、男女共学五〇人の一年生は、教室に相応しく四年生までに半数位になり、高等二年（今の六年生）を出る頃は更に減つて一〇人内外になつてしまふ。

そのかわり万事が家族的で、習字で真黒になつた一年生の手は、帰りに皆から御新造さん（ゴシンサン）と呼ばれていた校主夫人が、脚の高い木製の手水たらいにお湯をと

つて洗つて下さるのを常とした。（中略）

先生は六人、男の先生は三人が背広に蝶ネクタイで一人が和服、女の先生は二人とも日本髪で、長い袖のめくら縞などの筒袖で、メリンスの兵児帯、色は紫が多かった。」

（樋口桜五「工人遍路Ⅱ」、『ゴム』第十二巻第四号、一九六五年四月号。）

この樋口氏が三江小学校に入学したのは、明治三十二年であった。金子邸は、そのような児童たちの読書の場ともなつていたようである。

「（校主金子先生のお宅は）学校の廊下つづきで古いけれど広い平家であり、先生と御新サンの間に五男二女があり、上から英ちゃん、鈎ちゃんは後の法学士、農学士で同じく開成中学、私の十年と四年先輩に当る。誠ちゃんは同級、舎弟が二人いた。長女は三江学校の先生で、次女のお達ちゃんと何れも未婚、大家族そろって実に開放的な御家族で倶楽部のように出入自在、自分など一旦帰宅カバンを置いたまま出直し、本箱に読みたい本が沢山あり、話相手は多いし、運動場は近し、結局遊び疲れて一緒に入浴それから帰つたものである。」（樋口桜五、前掲文。）

ここに出てくる「舎弟二人」のうちの一人が柴田先生であった。先生は明治四十二年（一九〇九年）三月、同校高等科二年を修了し、東京開成中学校に入学した。

### 三、開成中学校の頃

開成中学での勉学については、先生の一文がある。今となつては、これが先生最後の文章となつてしまった。

「一年に入学したとき、英語は、背の高い、立派なU先生（佐々木梅治先生）。二年はイソップで口髭もあご髭も赤い石田羊一郎先生、何んだか聖人のような感じであった。三年も続いて、石田先生の担当でDickensのChild Historyであった。元来、英語は、各学年ともRoyal Prince Readerと、斉藤秀三郎先生のLessonとであった。

それが、四年で黄色ポイ表紙の Twentieth Century of に変わり、田辺元先生（田辺新之助先生のご長男四中出身）。やがて仙台に行かれ、つづいて、京都帝大の教授になられた。当時京都帝大に居られた西田幾多郎先生の講義に、文学博士の田辺教授が出られたとかで、大変な評判であったと、大正八年卒業奥村実（旧姓金子）から聞いた。同じく大正八年卒の結核の権威塚原俊雄さんに、弟共々随分ご厄介になった。

五年は、奈須川良先生 岡田氏 Step の五（静座法の岡田氏の兄弟とか。）この本の

終りの方にGeorge 五世薨去のときの新聞社説とか謂はれた滅法むづかしいのがあつて、いくら辞書を引いてもはつきりせず、どうにも困つた。ところがそこが当って仕舞つた。『どうも判りません』と申上げたところ、先生は、『いいからやってみなさい』とのことで、度胸で、家でやって来た通りに済ませた。ところが先生は、『それで、よいではないか』と言はれた。拙いところだらけでも、荒らすじはあつていたのかも知れない。自分には、実際にはよく判らなかつた。

これで見れば、英語の力をつけるのには、ただ英語だけやっても駄目で、日本語の読解力がなければ、本当の力にはならないのである。

先生については、こんなことがあつた。教卓の近くに居た人の話だと『先生は、朝の時間にはいつも御神酒をあがって来られた』ということである。吾々が牛乳をのんで来るようなもので、誰一人として、兎や角言ふものはなかつた。

のち、先生は旧制官立高校の教授になられ、さらに、大阪方面の旧制高校の校長になられた。

英作文は、井上十吉氏著のもので、アメリカから帰朝したばかりの山崎寿春先生であつた。

五年では、数学は宮本久太郎先生。いまだに何んとかやっておられるのも、全く先生

のおかげで、唯々感謝している。第二学期のことであった。五題中四題出来れば、100点を与へると言はれた。代数、三角法はどちらも四題づつしか出来なかつたのに、幸運に100点づつを頂いた。

卒業の前年ぐらいに、内田老鶴圃から、先生の名著『代数学精要』が出版された。就中、因数分解、方程式論、順列組合は、これまでのどの本にも見られなかつたものだ。その緒言は誠にすばらしいもので、『蓋し数学は愚者の領なり』と結んで居られる。

三大節のようなときには、いつも『白い総のついた、黒っぽい生地』の被布』を御召しであった。和算の御家での式服のようなものであつたかと想はれる。

お住居は、神楽坂に平行な通りで閑静な所であつた。神楽坂の夜店で、植木やさんが外人の客に『余計に水をやりすぎると枯らしますよ』と、一生懸命に説明しているのに、見かねて先生が *Too much water kill this plant* と謂はれ、本当に名訳であつたと、三年のときの英語の長谷川康先生が話された。

宮本先生は、のちに永く開成学園の校長をつとめられた。」

(柴田治「七十年ぐらい前の憶い出」より、「開成会会報」第五十九号、昭和五十九年六月、開成会発行)

後年、先生の指導を受けた者の多くは、その氣迫に圧倒されて、先生は生来頑健な身体  
の持主でもあると思ひ込みがちである。しかし、先生の半生は、他面で闘病の半生だった  
のである。そのことは意外に知られていないが、すでに中学四、五年から闘病生活が始ま  
っていた。そして、病氣のために将来の進路も変更され、工学系統への進学を断念されて、  
数学の道へ進まれることになつたのである。

(先生談) 「すぐ上の三番目の兄貴が昔の第一中学、いまの日比谷高校にあたるところ  
でございます。後は全部開成中学なんでございます。で、私、開成中学で四年か五年  
の時に、駆け出して行きましたら、血痰が出まして、その時は足がすくむような思いを  
しましたが、これ何だかわからないんで、お医者様へ行きました、何とも聞かなかつた  
んですが、後で考えると、肋膜炎か結核か、そういうところだつたらうと……。エー割合  
簡単に大変良くなつたといわれましたもんですから、いろいろ勉強もしたんでございま  
すが、そのうち時々そういう線が出まして、とうとう機械とか電気とか、やりたいなと  
いったような様子が出来ませんで、それじゃ仕様がなから、夜あるんだから物理学校  
へでも行ってやれということから、皆様の方におつきあい出来ますような様子になり  
ましたんで、病氣また悪くないといったような様子のように存じます。」(前出、「古

稀を祝う集い」にて)

先生は闘病生活をおくりつつ、大正七年(一九一八年)、柴田家へ養子に行かれた。養子といっても養父・柴田勝照氏は先生の叔父にあたる方であり、家も生家と同じ小島町内にあった。

#### 四、物理学校へ

先生が東京物理学校高等師範科数学部に入学されたのは、大正十一年(一九二二年)四月のことである。先生二十五才の時であった。

(先生談)「兄貴三人共、第一高等学校を出ておりましたもんですから、むかうつもりで勉強致しますと、中学時代に出ましたまずさが出てくるという具合になりました、充分打ち込んだ勉強が出来なかったもんでございますから、それで確か、数え年二十六か七になりました、ようやく、仕方がないから物理学校に入ろうということになりました。

エー物理学校の方、どうやら予定の期間で卒業が出来まして、さいわい先輩の松原先生、今、富士高校の方にお勤めでいらっしゃるようですが、その先生のご紹介によりまして、深井先生にご採用いただきまして、爾来、諸先生のご指導によりまして、ずっと参ったんでございます。」(昭和三十六年六月十八日、退職時の「PTA感謝の会」にて)

先生が物理学校の二年生になった時、つまり大正十二年(一九二三年)の九月一日に、

関東大震災が起こり、罹災された。そのため、本郷区駒込林町二二三番地へ転居している。震災の及ぼした影響はきわめて大きかった。先生もその後しばらくは、東京市の委嘱により区画整理委員を務めることとなった。柳沢家には九十八軒に及ぶ家作があり、その整理があったからである。当時の区画整理委員には、先生のように若い者はいなかった。この仕事はなかなか大変で、学校の帰りに回って区画整理の仕事をし、時には夜の十二時、一時になることさえあったという。

大正十四年（一九二五年）三月、先生は無事、物理学学校を卒業された。卒業することのむづかしい物理学学校である。三年の最短修了年数で卒業出来たのは、先生を含めわずか二人であった。

## 五、四中・戸山三十六年

### (一)、戦前期・四中時代

先生は、物理学学校を卒業と同時に、東京府立第四中学校に赴任された。大正十四年（一九二五年）四月のことである。いきなり二年乙組の担任であった。

「前任者のあとをついで、二年五組（甲・乙・丙・丁・戊と呼んでいた）四時間宛二十時間。因数分解のところからであった。教壇にはじめて立ったことであり、何も判らざるほんのかけ出しで、二年乙組の担任を仰せつかり、何んとかやれたのも、諸先輩のお蔭である。

授業のはじめ、終りは組長の号令で、全員一斉に起って、礼をするのであった。前記二年乙組の教室は、校長室の真上で、その足音の揃い方などで、組の空気を察知なされた校長深井先生からよく御注意を頂いたものである。この年度二百五十人の方々については、名前でも一番よく憶えている。坐席も憶えている人もある。また、お子さんと二代教えたことになる人もいる。

木曜日の午前、一・二・三年は鞆を左肩から掛け（登校のときは右肩から、下校のと

きは左肩からと定められていた)、ゲートルを巻き、組ごとに、隊伍整然校門(市ヶ谷加賀町、今の牛込三中、大きな公孫樹の附近)を出て、二時間位運動にでるのであった。柳町の坂を上って行くところ、戸山ヶ原(戸山学校々庭であったかも知れない)で体操をしてから解散したときの模様が憶出される。これも軍事教練が入ってから中止になった。

二十五年位も前になる。卒業生に富士山麓鉄道の重役さんが居られたので、四年生三日間富士五湖方面に修学旅行を行ったことがある。電車も吉田までで、三つ峠もそんなに有名ではなかった。やっと雨がやんだばかりの空模様で、三つ峠に登りはじめた。頂上に着いたときは、すっかり晴れて河口・西海・精進の三湖が銀色に光って、実によかった。まったく暗くなってから、河口ホテルに着いた。職員室は外人用という一番奥の室で、おそく迄話に花が咲いた。あのときの先生方は、いかにも愉快相だったといまだに卒業生の話にのぼる。生徒の方も非常に愉快だったといっている。」

(柴田治「創立七十周年記念に寄せて」より、戸山高校新聞第六十一号「創立七〇周年記念号」、昭和三十二年(一九五七年)十月三十日、第二面)

昭和二年(一九二七年)五月二十一日、臼井暉次郎・異様の三女・春子様と御結婚。昭

和三年(一九二八年)春には、区画整理が終り再び浅草区小島町に転居している。そして、昭和三年十二月、長女・京子様出生、昭和七年(一九三二年)七月、次女・明子様出生、昭和十年(一九三五年)二月、長男・武氏出生、昭和十二年(一九三七年)十二月、次男・勇氏出生と、家庭的には明るいニュースが続いた。また、奥様の話によれば、先生は非常に親に孝を尽されている。

一方、教育者としての歩みも順調であった。

(先生談)「四中時代、割合幸せにやらせていただきましたことは、三年から上を持つことが大変骨が折れたのでございますが、どういうことでございましたか、先輩の方のお骨折りのお蔭で三年を持ち、四年も持ち、五年もと、そして又、クラスの担任というのは、四年、五年はなかなかやってももらえないことだったんですが、それも割合早目にさせていただきました、特にその学年の主任なのは、なかなかさせていただけないんですが、そういうところも後から来た若輩でありながららせていただきました。」

(前出、「PTA感謝の会にて」)

先生は、若い頃、遊び程度に野球をやったこともあり、昭和初期には、当時四中におら

れた英文学の西川正身氏らと共に、槍ヶ岳へ登ったこともあった。しかし、身体のことを考え、あまり無理はなさらなかったようである。

昭和十八年（一九四三年）、東京都制実施により、府立四中は東京都立第四中学校となった。東京も空襲に脅かされるようになった昭和十九年（一九四四年）三月、先生は世田谷区経堂町へ転居された。昭和二十年三月十日の東京大空襲では、四中校舎も全焼した。丁度その日、先生は宿直であった。翌日の夕方近くに、真黒になって帰られた先生は、非常にがっかりされた様子であった。

#### □ 戦後期・戸山高校時代

戦前・戦後の変動は大きいものがあった。教育界も戦前・戦後で大きく変わったが、戦後間もない昭和二十一年（一九四六年）、先生は昭和二十一年度教科書編集委員（文部省）となっている。戦前・戦後の激動について、先生はあまり語る事がなかった。その御苦労は推し量るしかない。戦後、先生は健康を害されることがしばしばであった。いずれも先生持ち前のご気性で克服されたが、奥様のご苦労も並大抵のことではなかった。

昭和二十七年（一九五二年）二月頃、先生は新大久保の駅で貧血のため倒れたことがあつた。さいわい佐藤忠先生（数学）が同行しておられたので事無きを得たが、連絡を受けて

奥様と長男・武氏が迎えに行ったこともあったのである。

都立四中は、戦後の六三制施行により、昭和二十三年（一九四八年）四月、東京都立第四高等学校となり、昭和二十五年（一九五〇年）一月、東京都立戸山高等学校と改称した。

昭和二十九年（一九五四年）九月に発行された戸山高校新聞五周年記念『せんせい列伝集』第一編は、柴田先生を「名実共に古典的存在」として、次のように紹介している。

「『柴田先生はお元気でいらっしゃいますか？』よく電車の中で見知らぬ年輩の人から聞かれてびっくりすることがある。『え、お元気です。』と先生の顔を想い浮べながら答へる。先生は普通こわい人を通っている。よく先生列伝を書く〇君も新調の背広を着て、意気ようようと学校に来たとたん『おいおい』と呼びとめられ説教一時間『学生の本分は……云々』とやられて、今度の先生列伝を書くのはかんべんしてくれというわけに筆者にお鉢がまわってきたのである。自治会や運動部の猛者達も先生にだけはおそれをなしている。かくいう筆者も先生のクラスになるやたて続けに五六回お説教を食った。きもを冷したものである。先生が本校に来られたのが大正十四年、それ以来その厳格さと親切さを持って代々の生徒に深い印象を与え、かくして在學生が先輩に電車の中で驚かされるのである。こゝで親切という言葉がひよいと出て来たので、読者はびっくり

することであろう。筆者は先生位親切な人を未だ見たことがない。(中略)

先生の数学の授業は天下一品で筆記は全然許されず、問題の答案を黒板に書いて来て、訂正しに行くと、『いけない、ずるいよそれはカンニングと同じだよ』とやられる。ちよっとした所でもまちがえると一年生当時の復習を五、六分もやらされ、『こわいよ、誤は育つよ、注意してくれ』といつもいわれる。』

この『せんせい列伝』も、最後のくだりで先生の御健康が最近あまり思わしくないと聞き、「先生の御自愛を切に祈って筆をおく」としている位である。

先生がどのような授業をなさったかは、この記事によっても大体わかるであろう。先生は、さらに生活の仕方や勉強法について、長年の経験を背景に具体的に示すのが常であった。それらについては、後出の「柴田先生語録」に収めてある。そこまで教示するところに、先生の真骨頂があったのではないだろうか。

しかし、先生は戸山高校を退職するにあたって、先生に感謝するPTAの会の挨拶の中で、次のように述べている。

(先生談) 「私は体格につきましては、学校中で一番悪い体格を持っている……(し

かし) そう大きな休みもなく、特に数え年六十過ぎましてから、一層健康的になりました。六十過ぎてから、ようやく生徒の指導というのが少しわかったというのじゃなからうかと、これが実感でございます。

生徒がこういう風に行くと、うんそれはこうやって、こういう風に行っているんじゃないかということが……、エー一年一年と少しずつ利口にさせていただけになるようになりました。」(前出、「PTA感謝の会」にて)

先生が六十といえは、昭和三十一年(一九五六年)のことである。この年は丁度先生が四中・戸山を通じての三十六年間で、最後の担任クラスを卒業させた年であった。

先生が戸山高校を退職されたのは、昭和三十六年(一九六一年)三月、満六十四才の時である。

(先生談) 「昨年(註、昭和三十五年)の四月、来年になると数え年六十六になるから、是非来年はやめようと……。こう思っておりました時に、エー夏場所の時に栃錦がサッと引退していったもんでございますから、彼も江戸っ子だと、東京の者だと——やはりああいう風にはいかなきゃならないもんじゃないかと。彼がなかなか良いお手本を出



してくれただもんですから、暑い時分に石平先生（校長）に申し上げました。石平先生はうんうんと聞いて下さるだけで、何ともおっしゃって下さらないんで……エー暮に又、校長先生お忘れもないでしょうが、是非一つお願い申し上げたい」と、こういう風にお願ひ申し上げました。（前出「PTA感謝の会」にて）

この頃、先生はよく昭和初期の卒業生クラス会などに招かれた。そこで社会的に活躍する卒業生の姿を見て、先生は自分の使命を果たし終えた、という安堵感を強く持たれたようである。

## 六、武蔵工大付属高・晩年

昭和三十六年（一九六一年）四月、先生は武蔵工業大学附属高等学校教諭に迎えられ、昭和五十二年（一九七七年）、満八十才で同校非常勤講師となって、専任から退かれた。戸山高校を退職する直前の昭和三十六年二月には、舌先の腫物手術で入院し、あわせて人間ドック入りをしたが、異常はなく、すっかり健康になったと述べている。その時、先生のお世話を下さったのは、日本医科大学外科の藤木弘毅氏（昭二十六卒）であった。

（先生談）「実は昨年（註、昭和三十五年）の十月に歯医者さんに行きました時に、舌の先が腫れているんじゃないかと、こういう話がありました。エー実はうっちゃらかしておいたんでございますが、十二月の始めに内科の先生に診ていただきまして、心配なからうということだったんですが、外科の偉い先生に診ていただきやはり心配はないけれども一週間か十日入院しなさい、それで切ってしまった方が具合がいいんじゃないか、というお話をいただきました。

エーその時分、こう考えておりました。三十六年間、あまり悪口言ったんで、悪口のしこりが少し出来たんだろうかと（笑）。こう思いましたんですが、しこりは入院して

すっかり取りましたんで、もう今度は悪口が出ないかと思うとそろそろ悪口も出ておきますんで（笑）、又、健康は回復しかけているかと……」（前出、「PTA感謝の会」にて）

先生が武蔵工業大学附属高校の非常勤講師をも退職なさったのは、昭和五十六年（一九八一年）三月である。満八十四才であった。この四月、先生は胃の手術を受けている。そのことについては奥様の「憶い出すままに」（後出）でもふれられているが、三月二十二日に入院し、四月九日に手術、五月一日には退院した。非常に早い回復ぶりであった。冬でも足袋をはかずに、ステッキを持って、朝の散歩をしておられた。

それから四年、昭和六十年（一九八五年）四月三日、先生は老衰のため逝去された。あと十六日で、満八十九才の誕生日を迎えられるところであった。その時の新聞は、先生の死を次のように報じている。

日本経済新聞、昭和六十年四月五日、朝刊

柴田 治氏（しばた・おさむ）元東京都立戸山高校教諭）3日午後10時4分、老衰のため東京都世田谷区経堂三ノ一〇ノ二二の自宅で死去、88歳。告別式は5日午後1時

から自宅で。喪主は長男、武（たけし）氏。

昭和36年まで36年間にわたって数学教師として旧制時代から同校で教べんをとった。教え子に仁杉国鉄総裁、原文兵衛元環境庁長官、広田宗小田急電鉄会長、俳優の高橋昌也さんなどがある。

朝日新聞、同日、朝刊（東京面）

柴田 治氏（しばた・おさむ）元戸山高校教諭）三日午後十時四分、老衰のため世田谷区経堂三ノ一〇ノ二二の自宅で死去、八十八歳。葬儀・告別式は五日午後一時から自宅で。喪主は長男武（たけし）氏。

大正十四年に戸山高校前身の東京府立四中の数学科教諭となり、昭和三十六年に退職した。厳格だがやさしく、「ガンマー」のニックネームで慕われた名物先生だった。

読売新聞、同日、朝刊（東京面）

柴田 治氏（しばた・おさむ）元都立戸山高校教諭）三日午後十時四分、老衰のため、世田谷区経堂三ノ一〇ノ二二の自宅で死去。八十八歳。葬儀・告別式は五日午後一時から自宅で。喪主は長男、武（たけし）氏。

大正十四年、東京府立四中（戸山高校の前身）の数学科教諭となり、昭和三十六年退職するまで、「ガンマ」のニックネームで親しまれた同校の名物先生だった。

第二部 特別寄稿 「憶い出すままに」

（柴田 春子）

これは柴田先生の奥様（春子様）がお書きになった『憶い出すままに』（柴田家蔵、A5版、和紙印刷、全二十頁、非公開）をそのまま収めたものである。奥様は多少目も不自由になっておられたにもかかわらず、約六千字に及ぶ回想をおまとめになられた。御家族の方々も清書など全面的に協力して、昭和六十年の暮には完成し、昭和六十一年秋に印刷、御親族に配布されたとうかがっている。当初、奥様には公開するお気持ちが全く無かったにもかかわらず、ここにその全文を収めることをお許し下さった。厚く御礼申し上げる次第である。

昭和六十年四月三日午後十時四分、太い太い綱が切られてしまいました。

心のどこかに大きな穴があいてしまったようです。涙がとめどなく流れてまいりました。こんなに悲しいことってあるでしょうか。

昭和二年に結婚して、半世紀をはるかに越える歳月でございます。

「一日でも長く生きて」

看とってさしあげなければ、と覚悟は決めておりましたものの、長ければ長い程、悲しみは大きいのでしょうか。

いつの日のことでしたか、旅先のことでした。部屋の窓から果てしない太平洋を見ていました。そこには人影一つ見えず、ただ無限に広がる大海原に、古い小舟が一艘寂し

そうに岸边につながれていました。

今、しきりに私の頭のなかに、この情景が浮んでまいります。

七七日忌（四十九日）に当る五月二十一日は、奇しくも五十八回目の私どもの結婚記念日でございます。

私どもがここまで参れましたのは、皆様方のご厚情の賜物と心から感謝申し上げます。

主人は、父金子親成、母よ弥の七人の子供の六番目、四男として明治二十九年四月十九日、東京市浅草区小島町で生まれました。

父の弟勝照が家督相続をした柴田家に子供がいないため、主人が柴田家の姓を継いだということでございます。

お兄様三人は、第一高等学校、東京帝国大学を卒業され、大変温厚なおやさしい方々でございます。お姉様はお二人とも、結婚後子供さんを残され若くして亡られたときいております。

子供の頃、友達をいつも泣かして帰ってくるのは、「治なのですよ」と、お母様がよく小さい時のお話をして下さいました。

近くの大川（隅田川）で水泳の練習をしたり、野球が大好き、山のぼりも、とスポーツマンの部類に入るのかしら……。

勉強好きの主人は、きつとお兄様方と同じ高等学校、大学へ進みたかったので、不幸にして中学校卒業の時、病に倒れてしまったのです。東京物理学校（現東京理科大学）を卒業したのは二十九才のときでした。

学校卒業と同時に、大正十四年四月、東京府立第四中学校へ奉職し、以後昭和三十六年三月まで三十六年間お世話になりました。

当時の校長先生は深井鑑一郎先生で、大変に厳しく、「胸を張って大きな声で講義をすること」これが深井先生の教えであったと聞かされております。

その頃はまだ大正十二年九月の関東大震災のあとで、残務整理が沢山ありました。焼野原となった浅草区小島町の柳澤家（金子家、柴田家が仕えていた殿様）の土地も灰になり、借地人百軒近くの方々がバラックを建て、住んでおりました。主人は頼まれて、その土地の区画整理の委員をしておりましたが、大変な仕事で、他の地区は年輩の方々ばかりのなかでこんなに若い委員はいないということでした。

駒込林町に借家住いをしていましたので、学校からの帰途、小島町へまわり、帰宅が深夜の十二時、一時になることもしばしばでした。翌日は又朝早くから学校へ出かけて参ります。

昭和三年、ようやく区画整理が終り、一軒の小さな家を建て、小島町へ移りました。

この間、よく身体が続いたものだと思います。東京でも有名な厳格な学校です。毎朝けわしい表情で出かける姿をみて、男の方は毎日が戦いなのだなと思いました。

身体の弱い人です。「どうかご無理をなさいませんように」と祈りながら、心をこめて靴を磨く毎朝でした。

昭和十五年一月一日のことです。元旦は学校で御式があり、モーニングの正装で出かけます。

帰宅してすぐに床に就いてしまいました。とうとう病に倒れてしまいました。前々からお世話になっていた、下谷稲荷町にお住いの吉田先生とおっしゃる恰幅のよい、鼻の下に立派なひげをたくわえられた親切な名医でした。毎日午後になると、羽織、袴のお姿で、人力車に乗って往診に来て下さいます。今でも、当時の先生のお姿が目に見えて参ります。とうとう一年間の静養となってしまいました。

翌年四月、また厳しい学校が待っておりました。癒れば病気のこととは忘れ、それ以上に働くのが常でした。それに加えて、次第に戦時色が濃くなり、食物も不足がちになって来ました。小島町に住んでいる時には、千葉方面から担ぎ屋さんが来て、いろいろな品物を届けてくれました。

昭和十九年、世田谷区経堂に移転しました。近くに農家がありましたので、なんとか南

瓜、じゃがいも、トマト、菜類等を分けて頂きましたが、それでもとても足りません。主人の身体に肉体労働は大禁物です。食料の調達、薪割りなど、力仕事は私がひき受けました。

昭和二十年三月十日、東京大空襲で学校が焼けてしまいました。当日宿直であった主人は、翌日夕方近く真黒にすゝで汚れ、帰宅しました。八月終戦を迎えるまで、他の学校を借りての授業、交通事情がむづかしくなる中での通勤、いろいろご苦労があったことと思います。ですが、よく頑張って下さいました。

世の中の混乱、食料不足は、戦争が終ってから一層ひどくなりました。過労と栄養不足からでしょうか、昭和二十一年、また病に倒れてしまいました。今度は激しい咯血です。なかなか止まりません。

実弟の友人で、東大の内科におられたその道の権威、塚原俊雄先生にお願い致しました。「こんちくしょう」

と大声で叫びました。しつっこい病魔に対するのしりの声でしょうか。いつまでも病気を克服できない自分自身への憤りでしょうか。

塚原先生の大変なご努力と、偉大な精神力によって、それも癒えることができました。

それから幾月がたって、今度は咳が出て止らなくなりました。むづかしい病気とのこと

で塚原先生も頭を抱えておいででした。けれども先生の必死のご努力と、主人の強い意志で、先生のご指示を忠実に守り、病も快方に向いました。良い先生と相まって、病にうちかったのだと思います。

食べものの好き嫌いが大変に多く、果物、野菜はごく限られたものだけで、他は大嫌い。好物はお肉、そして羊羹などの甘いものは一日も欠かせませんでした。栄養のバランスがとれるわけがありません。いろいろ考えた末朝の献立に一皿添えてみました。大根おろしに白す干しのお酢のものです。食べるどころか見向きもしません。今日も、次の日も、その次の日も。かれこれ一ヶ月もたったでしょうか、やっと少しお箸をつけました。本当に嬉しかった。この一品は最後の床に臥せる日の朝まで、何十年一日も欠かさず、無くてはならない一皿となりました。その後、果物、野菜も限られたものですが少しずつ食べてもらえるようになりました。

戦後の学制改革で、伝統ある四中も昭和二十五年から男女共学になりました。武士の流れをひき、明治生れ（頑固）で、男尊女卑の強い時代に育った人にとって、どんなに戸惑われたことかと思えます。

第四中学校、戸山高等学校を通して三十六年間、本当にご苦勞様でございました。この間は学校ばかりでなく、家庭においても、日曜祭日もない緊張の連続でありました。

優秀な子弟に恵まれ、諸先生方はじめ城北会の皆様のお力添えによって、自分の強い信念を貫き通すことができた一生であったと思います。

私からもあらためて御礼を申し上げます。

昭和三十六年三月、六十四才で都立戸山高校を辞したあと、ご縁があつて、武蔵工業大 学付属高等学校へ勤務いたしました。

それまでとはちがい、少々緊張感もやわらぎ、気分もゆったりしたのでしょうか、自分の健康に気をつけて下さるようになりました。毎朝五時〜五時半の間に起き、塚原先生のおっしゃるように、まず乾布摩擦、どんなに寒い朝でも一日も欠かさずに行っていました。それから、それまで手にしたことのない竹箒をもって玄関の周囲を掃除。きれいにする為ではなく、運動の為に、朝ごはんがおいしくいたゞけるように、と真冬の寒い朝でも暗い中で掃除をつゞけておりました。

成城学園前駅から学校までは、バスに乗らず毎朝歩いて通っておりました。学校へ参りますと、数学科のお若い先生が、毎朝必ず熱いお茶をご用意下さったそうで、本当に嬉しそうに話しておりました。

毎年、春休みと、秋の学園祭で授業がお休みの間を利用して、旅行に行くようになりました。四中、戸山時代には想像もつかないことです。旅行にくわしいご親切な先生が居ら

して、主人がご相談すると、毎回無理のない日程を作って手配をして下さいました。二十年近く、三十数回に及んだと思います。ほんとうに有難うございました。

いつも静かな景色のよいお部屋で、雄大な山を眺めながら感動し、清らかな溪流の音をきゝながら都会の雑音からのがれ、たのしい旅情を満喫することができました。そして数多くの想い出を残して下さいました。

塩原那須方面へ参りました時には、必ず昔の四中の道場へ立寄りしました。初めに参りました時には、きたない荒れ果てた建物、うっそうとした木々、その間からごうごうと音を立てて流れる川の音が不気味に聞こえるだけでしたが……。昭和五十三年十月最後に訪れた時には、校舎もきれいに建て替えられ、生徒さん方が七〜八人おられました。昔、太鼓を打ちならして起床の合図をしたこと、肥桶をかついで農作業をしたことなどを話していただきました。

武蔵工大付属高校には、二十年間八十四才迄教壇に立たせて頂きました。

これもひとえに、多くの方々のお支えがあつた賜物と御礼申し上げます。

その頃までは病気もせず健康そのもので昔のことかうそのようでした。城北会の会合を無上の楽しみに、必ず出席させて頂き、皆様のご立派なお姿に接することを喜びとしておりました。家に帰りますと、ことこまかに家族に語るのが常でありました。

最後の教壇を去って暫くした、昭和五十六年三月、突然胃から吐血、東京共済病院へ入院し、胃ポリープ摘出手術をいたしました。入院、手術に際しましては、花見一先生（昭和五年四中卒）、中川圭一院長先生（昭和六年卒、故人になられました）に大変お世話になりました。院長先生はじめ、皆様の手厚い看護のもとに、輸血することもなく、四十日ほどで元気に退院いたしました。花見先生、故中川先生はじめ皆様方に心から御礼を申し上げます。

退院後は、日に日に健康をとり戻し、早朝の掃除、十年來のロシア語の勉強（ラジオ放送）、そして八時半から一時間の散歩……と、毎日規則正しい生活の明けくれでございました。

しかし五十九年頃から少しずつ体力が弱まって参りまして、それまでいつも心待ちにしておりました城北会の会合にも失礼することが多くなりました。体調のよろしい時には息子につき添ってもらい出席させて頂くこともありましたが、五十九年十一月が最後になりました。

六十年正月は大変に元気で、新聞広告をみて、「千字文」（岩波書店刊）に興味をもち、息子に買ってこさせました。

「非常におもしろい、これから勉強したい」と、毎朝少しずつ読んでおりました。

その矢先、同月十八日朝、腸からの出血で主治医のご指示で急拠、慈恵医大第三病院（狛江）に入院しました。しかし、今回の入院では、検査のたびに落ち込んでいき、「家に帰りたい」

と申しまして、先生のお許しを得て退院し、自宅で治療を続けました。この間家族の昼夜を分かたない看護のもとに、四月三日夜、息をひきとりました。

心暖かい皆様様に囲まれ、幸せな一生をおくらせて頂きましたことを、主人に代り、心から厚く御礼申し上げます。

存命中の御見舞をはじめ、葬儀告別式にはお忙しいなかを多数の方々にご参列頂きまして本当に有難うございました。

城北会の方々、武蔵工大付属高校の方々には、いろいろとお心のこもったご厚情を賜りましたが、至らぬ私故、何のご恩返しも出来ませず、たゞ感涙にむせぶばかりでございます。

主人が逝きましてから、早くも一年余が過ぎましたが、思い出は尽きないばかりか、一層強く思いおこされて参ります。

慣れないことをさせて頂きました。

拙ない文章ではございますが、お許し下さいますようお願い申し上げます。



第三部 柴田 治先生語録

卒業生へおくる言葉

世の中は、君達が十分腕を磨いて一日も速く来て呉れることを待っている。

そこで、大きく遅ましくスタートを切って呉れますように念じています。

昭和三十一年二月

(柴田)

これは、柴田先生が折にふれてお話しになられたことから抜き出した先生の語録である。みていただくとわかるが、語録というにはふさわしくない体裁となっている。語録といえは、ふつうは短かくて金言のような言葉を収めることが多い。しかし、柴田先生の場合、つなぎの言葉や具体例以外は、すべて金言といっても過言ではないような価値をもっている。

そこで、ここでは短かく区切らず、話のまとまり毎に見出しをつけて収めることにした。そして、あのなつかしい口調をなるべく思い出すことが出来るように、しゃべり言葉のまま収めることにした。

なお、これは巻末の資料「柴田先生講演等録音テープ」から起したものであり、文末の年月日は、そのテープの録音日を示している。

## 一、今日の日本

戦争の後は方々なくなってしまうまで、狭い土地柄に人口約一億ということ、いい空気さえなかなか吸いきれないような状態になってきました。特に東京、就中、工場の沢山ある方面では、非常に空気が悪い。なお、全国的にみましても、四日市など非常に空気が悪いというような話を伺っておりますが、エーどうしてもこれは、住みにくい、狭い、物質のない所におきまして、どうしてもお互いの立つためには、日本人のもつ優秀性を一層優秀にして、しっかりしたものの層の厚いところで、お互いの立つ瀬を考えていかなければならないんじゃないか……。

大学を出ましてから、最近、平均年齢が非常に伸びて参ったものですから、まあこれは六十年、七十年あるんじゃないか。そういう長い期間、いつでも自分で勉強をして、いつでも前進をしていくような様子でなければ、人生誠に不愉快で仕方がない。エー明日や明後日の楽しみでなくして、何十年という長い間、愉快に生活出来るということは、仕事の面において大いに張り込んでやれると……そういう時に本当の愉快が出てくるように存じます。

二、小・中・高等学校

小学校でございましたら、先生の方がかなり活動をする。中学校に参りましたら、まず終りの方は大体先生はあまり用はないんだと……。高等学校というところは、先生がやるところではなくして、生徒自体が活動をするところだと存じます。

ところが、先生の方が案山子でございますと、とんと授業の能率が上ってこない……。残念ながら案山子が手を出すような形になっておりますが、自体、高等学校というものは、自分でやるところと、私はそういう風に存じております。

(昭和三十九年六月二十七日)

三、高校三ヶ年

これは私だけの経験で、あまり言っている人がいないけど、あまり持つものが沢山でないのに早く大学に入ってしまったという人は、割合先の伸びが悪い。そうでなくして浪人の苦勞もした、それで持つものを出来るだけ大きくして社会へ出ていく、大学へ入っていく、それがむしろ大事なところだ。世の中に出てから、いつでも専門の本を読んで、いつでも前進をしていくという、そういう心がまえというか、実行力というか、ファイトというか、そういうものはいつつくかというところ、これが高等学校三ヶ年間、そこにプラス・アルファと……。あなた方はまさに三ヶ年間の最後の一年になってきているわけだから、このところでけちくさい勉強はやるんじゃないと、こういうこと。着実な方法をとっていきなさい。

(昭和四十年五月十一日)

#### 四、年輪と浪人と

南の方の木は、年がら年中暑いので、こういう年輪が出来ない。蜂がいても蜜は溜めないそうだ。しょっちゅう暑くて、行けば蜜があるから。ところが日本みたいに寒い時、暑い時、いろいろあると年輪が出来上る。この年輪のしっかりしたものこそ、社会に出て非常に役立つんじゃないか。そういう意味において、万が一、うまくいかないことがあっても、敢然として年輪を一つ増やして、向うの奴は気の毒だと、ストリートで行きやがったのを、俺は一年浪人してもっと大いに人間的に成長するぞと、こうやっていくとけっこうなことで、これはおうちの方には内緒の話と、こういうこと。黙っているんだよ。

(笑)

(昭和四十年五月十一日)

#### 五、根性のある人

自分で根性をもっている人、存外、これが他人に対しては非常に丁寧だと……。実際、私共、教えた人に会いまして全部偉くなっている連中が丁寧でございます。ところが勉強をろくにしない奴を見ると、むしろその胸を張って、上を向いて歩こう。てなことになっっています(笑)。どうもそういうのは、あまりうまくいかないようでございます。

あなた方、上だけ向いて歩かないで、もっと謙虚な面で行くことが非常に要るんじゃないか……。

(昭和三十七年七月十四日)

## 六、謙虚と素直

学校というのは謙虚でなければうまく参りません。謙虚ということと素直ということとは、字も違いますし、無論内容も違うと思います。違ふんでありましょうけれども、かなり共通な部分が多いんじゃないかと、こう思います。そういう意味で、謙虚であるということのためには、やはりおうちで素直であるようになければうまくいきにくいと、こうもとれるんじゃないかと、こう思います。

ですから、お子さんがまず謙虚であるように、ご家庭におきましては、素直であるように。エーどうしても素直になりませんということがありましたら、お遣わして下さいまし。よく様子をきいてみますから。そんな親をいじめる奴があるかと、こうきいていきま

すから。そんなことで絶対、各教科などうまく出て参りませんから。

(昭和三十七年七月十四日)

## 七、大名的な生活

朝起きて据膳で御飯をいただいて行くなんてのは、これは大名みたいなもんで、大名ってのは、これは一番悪い生活のあり方だと思えます。それを今、学生が好んでやっている形ですから、どうか大名的でない方がよいと思えます。ご家庭でお子さんをお大名になさらない方がいいのではないかと……。やはり大名でない、働ける人達の方がよからうと、こう思います。

(昭和三十五年十月二十二日)

## 八、実力を身につける

いわゆる実力とでもいうものが身についてくるのにはどうしたらよいか、というようなことを特に生徒の方の人は考えているんじゃないか。そういうような模様がすぐ出るようになるのに、腕組みをしていて時間が経てばそうなるのか、あるいは一つの計画によって着実に実行していく時にそれが出てくるのだろうか。エー時間の経過を待つだけでは何も得られないということがよくわかっておりますので、エーどういう方法でいったらよからうか……。そこで二つあると思います。

一つの方は、各教科についてどんな風にもっていくのが一番の道であろうか、これが一つです。いま一つの方は、そういうような道にかなった方法をとっていきましても、頭そのものの状態が悪いために、思うような受け入れが出来ない……。これでは役に立たんと……。まあ、これを身体的条件とでもいっておきます。この二つが並び揃ってこなければうまくいかない……。

エー、先へ行って参ってしまうようでは、これは役に立たないんでございまして、体の方に悪いような勉強の仕方ならば、これは生涯使えるような勉強の在り方ではない。目的は大学に入るのが目的ではない。大学に入って専門を修めて……エー専門をやるのは大体

丸二年位、特に四年になるともう就職だといっているのでガタガタしている。エー精々二ケ年位、二ケ年位で何が出来るか、やっとならばここで電車に乗れば品川まで行ける、という程度のものじゃないか。

もう一つは、大学を出てから、何時でも本を読んでいく、進歩、発展の出来るくせをつけていく。それがむしろ大学へ入るまでのところで身につけてくるんだということ、そういう意味で大学の受験というものは非常に意義をもっているもんだ、ということになります。

大学を出てから、生涯——これはまず、いま十七、八位として、残る将来が大きくいえば八十年位、小さく身積っても六十年はあるんじゃないか。大学を出てから五十年はある。六十年なり五十年、始終本を読んで前進をしていくというやり方を高等学校三ケ年間、あるいは大学に入るまでに……もしこれが十分身につかないのなら、一年、二年ゆっくりしてもさしつかえはなからう。世間では早いことのみ考えている人があるようでございますが、あんまり早く行くと、どこかへ行くことも早いんじゃないか（笑）。しっかりしたものを持っていくことがいかに大切であるかということ、卒業した人がちゃんと出してこられている。

（昭和三十七年七月十四日）

## 九、朝早く起きる

夜中勉強をする人は勉強の仕方が違うと……。結論からはじめに。結論を急ごうという具合に……。

いかにも合理性をもつかの如く、俺の勉強は夜型だ、などという人があるが、事実は夜型という型ではなくして、勉強の仕方を知らないがための方法だということである。これはかつての本校の出身者の大勢についてためしてみても、少しも誤ちがなかったばかりでなく、一層それでいいなということをはっきりさせて下さったのが林先生の「頭の良くなる本」。大脳生理学の面からいってと、こういうこと。

エー、さっき話した人は体が悪いというので、夜は十時に休んで朝は五時に起きた。そして朝の食事というものは、毎日おいしく頂戴をした。食事をいただく時に、おふくろこしらえるから食ってやるんだなんて、そんな気持でなしに、やはり頂戴をするといったような気持でいった場合に、体はのびる、頭は良くなる、とこうなるんだから間違えないように。

いずれにしても、夜十一時までにはもう寝ることにする。そして六時に起きる。六時に起きるってことは、六時頃起きるといふのは駄目ということ。これも大勢の人にきいてみ

て、六時頃起きるって人は決して六時前に起きていない。六時十分過ぎ、六時二十分過ぎ、これを皆六時頃とこういつているわけで……。だから六時頃ではなしに、六時といったら跳ね起きてくる。それで顔を洗って、寝ている状態と起きている状態をはっきり区別して、十分位駆け足をしてきてもいいし、あるいは冷水摩擦をしてもいいし、何かそこに入れないさい。

(昭和四十年三月十一日)

## 十、早寝早起

何百人、何千人の人で試してみた結果、七時間の睡眠が早目の時間にとられるならば大丈夫と……。もっともそのバックとなるところに、三回に分けていただく食事が三回とも、特に朝の食事がおいしく頂戴が出来るという線が出来ているならば、健康は大丈夫で、頭も伸びる土台ができています、こういう風になっております。ですから朝は早く起きるように。ということは、夜分早く休むように。

エーそういう話をしますと、必ずといっていいほど「それならば勉強が残ってしまって、十一時ではやれなかった、そうすればどうするんです。」そんな頭の悪いこと聞かないで、十一時までに終るように仕事をチャキチャキやっていく。そうしなきゃ世の中やれないんだから……。もしそれでもやれなかった、どうしましょうかと。十一時がきたら寝る。そのかわり翌日は朝四時に起きてやろう。エーおうちの方に迷惑願って起きるんだなんて、そんな負けてるような根性じゃ駄目なんで……。やはり根性というのはむかっていくというのが入ってるわけで、それからそれがつながるんだということ。つながるとなるとそう簡単にはいかない。やはりやれるようにしてやっていく……。

エー、朝六時に起きるという場合は、夜十一時に休むということ、朝六時——そこで冷

水摩擦でもやってみなさい。結果的にはご飯がおいしくいただける。ここにも毎日やっていくということ、むかっていく気持が入っていると思います。それが非常に大切なんじゃないかと思えます。

(昭和三十七年七月十四日)



## 十一、速達の便

家で文句を云っている人は、大学の試験というものがうまくいってないという事実が沢山ある。つまり統計の結果そうである。

たとえば、数学をやって苦心惨憺して目をキョロキョロさせているという時に、お母様の方から、すまないけれども急用が出来たからこの速達を郵便局へ行行って出してきて下さいと、こういう風にお母様がおっしゃったら、"そんなこと出来るもんか"なんていわないで、困ったなと一時思っても、"はいっ"とこういって、郵便局へ歩いて行ってきなさい。そして家に帰ってきて、"速達出してきました"と、こう家へご報告しなさい。そして、さっきの出来なかった問題に取り組んでみなさい。いいアイデアがたちどころに、サーッと浮かんできて、その問題はすぐに解決してしまう。そうなるもんだから……。

(母親達へ) エーどうぞお母様方、時々、速達位お出し下さいますように。どうぞ(笑)。その時に、これが試験をしているんで、文句をいうようであれば、いまだ遠しと……。はいっというようであれば、その面は一応第一要件をパスしたと、こういう風にお考えになっていいんじゃないだろうか。こういう風に思いますから、エー速達をひとつ……。どうも出すところがないというのであれば、福島先生(クラス担任)のところへでもお願いした

らいかがでしょうか(笑)。出す場所はいくらもございますから。……どうせ中味はわからないんですから、白紙でもけっこうですから、時々速達をお出し下さいますように……。

(昭和四十年三月十一日)

## 十二、夜の散歩

六時から食事が始まれば、まず七時位までは時間をあけていいんじゃないか。食事そのものは、一体どの位時間がかかるだろうか。大勢にきいてみまして、最高レコード三十分。ま、三十分という人は滅多にありません。大体十五分か、精々二十分。これは食事ですから長くて結構。

食事の後、ここで夕刊と朝刊の残りを読んでいいんじゃないか。ここで、十分か十五分位、必ず散歩をしてることが要るんじゃないか。寒くなってから非常に有効です。第一のねらいは、自分の部屋が閉まっている、これを開け放しにして外へ行ってくる、自分も良い空気を吸い込んでくる、それから血のめぐりを良くしてくる。それからエー、もう一つは、目の方が大分草臥れてくるので、遠くのネオン・サインでも見て、目の別の筋肉を使ってくる。家へ帰って本を読み出したらグーッとやれると……。眠くならないそうです。もし夜分勉強して眠くなるならば、方法に何かまずさがありはしないか。勉強の仕方がケチくさいんじゃないか……。こういう時間をうまく出していったら、そういうことにはならないでしょう。これは黙っている人達がかなりやっております。

(昭和三十七年七月十四日)

## 十三、日曜日

(戸山の生徒は) 大体勉強したいという意欲のある人達ですから、時間を惜しんで勉強する。これはよくわかるんですが、日曜日、朝から晩までといっても、そうつながらないんです。で、むしろ日曜日あたりは、朝はいつもの通り起きてがっちり勉強しておいて、一時頃から二時間なり、三時間なり、多摩川のへりでも歩いてくるとか、頭は使わないで体の方に、普段よりも余計に汗をかいてくるといような面を入れますと、次の一週間が非常に良い。一月に一遍位は、ご家庭には日曜日ご迷惑なんでしょうが、六時なら六時には新宿に集まりまして、小さい山位は歩いてくる。そして日のあるうちに帰ってくる、といったような線を出しますと、次の一週間がうまくいく、という風なことでございます。

(昭和三十五年十月二十二日)

## 十四、勉強法

### (一) 数学の勉強法

数学の方は、随分骨が折れる筈でございます。これは自分でやらなければ駄目なんでしょう。近頃は受験参考書とか、大変便利なようになっていて、むしろ勉強する人を毒する面が沢山あります。

学校の教科書の方を隅から隅まで自分で読んで、自分で計算して……。たとえば本に例題があがっております。そうしましたら、例題は自分で計算をすると、そういう風にさせておきます。自分で計算をしている時に、本の中にあがっております問題、あるいは数そのものを正しく書き取れるということが出来ましたら、その人は非常にしっかりした人と云っていいんじゃないかと、こう存じます。書いてあるものを写すんですから、必ず写せると思ったら大きな間違いでございます。まず、そういう面から非常に気をつけておきます。

もし会社に入りまして、0を一つ余計つけたとなりましたら、一体これはどういうことになるか、でございます。あるいは計算して出されたものを電子計算機に入れた時に、電子計算機は正直でありますから、嘘はつかない、わずかの違いが非常に大きな違いとなります。

て表われてくる。こういったことなど沢山出ておりますから、それで、こういうことを申し上げますと、如何に正しく書くということがむづかしいか……。それがきちんといくようになりますれば、大学は勿論のこと、出てからでも着実な仕事が出来ると存じます。

それからもう一つ、こういうことなどはご参考になるかと思えます。私は、黒板でなるべく大勢に、平等にやらせるようにしております。黒板というのは、何も映らない筈ですが、私共から見えておりますと、黒板に書かれた答案を見ることによりまして、少なくとも前日の勉強がどうであったか、あるいはその問題に対してはどうであったかということが、それを通してよく見えて参ります。

エー誠実に取り運んでないとうまくいかないもんでございますから、それで黒板のところですまきれいに書かせる。名前をちゃんと書かせ、きれいに書かさせて、これがきれいに書ける場合はノートがきれいに書けている。ノートがきれいに書けているようになれば、生涯、何を書いても、自分でも間違いなくやれるし、他人様にも気持よく読んでいただけるというものが出来ると。エーそういう風なものを何とか三ヶ年間で身につけてもらいたいもんだと、こういう風に考えております。

それから、試験などを致しております時に、よく発見致しますことは、あの人はあそこのところをこう間違えているなと、それからぐうっと回って又通って見ました時に、又ち

ちゃんと見直しをしている。これで出てきた答案を見ると直されていない。もっとはっきり申し上げますれば、一度誤り書かれたものが、見直すことによりまして訂正されるということ、まず非常に少ない……。

数学の個々のものにつきまして、自分で勉強していくということよりほか方法はございません。それで、まず学校で使っております教科書を着実にやっってもらいたい。エー、どの学科にしましても、学校のをそっこのけにしていくというのは全く駄目です。

(昭和三十九年六月二十七日)

(これは武蔵工大附属高校の一年生父母会でお話しになったものです。)

## □ 英語の勉強法

英語の方をやる場合に、こんなことをしてみたらどうか……。短かい文章ばかりやっていると英語の力はつかない。英文解釈法ばかりやっていたのでは力がつかない。長いものを読むように。で、長いものが読めるようにというので、英語の先生は英文解釈法もやって下さる、とこういうことになっている。エー本末転倒しないように。

ま、リーダーのようなものを想像する。何遍もこうやって読んでいきなさい。一頁半位まで読んでしまったら、その次に、こう一つながりだけ読んでいく……。どうもこの字が

はっきりしないという時に、すぐ字引は引かないように。これを前後の関係からこういうことであろうと推定をしてみなさいよ。悪い言い方をすればアタリをつけてみなさい。

この次に、字引を引いたものは必ずノートに書いていくこと。発音、品詞を書いて、そして、その場所においてもっとも適当なりと自分で判断したものを一つか二つ書いておく。ここは若干あけておきなさい。そこで先生は何ておっしゃるか、自分でこう判断したんだが先生も同じだったというのであれば、この字だけは先生と同じ。また今度はその次が出てきて、ああやっぱり先生はいいのをやって下さるなというのが出るかも知れない。一応こういうのが出て、字引きを引いたのは必ずアンダーラインを引って張っておきなさい。それから自分ではアンダーラインを引って張らなかつたが先生が非常に注意して下さったというところは、文章としてアンダーラインを引って張っておきなさい。

そこで、こんな風に使ってみたらどうかしら。

今日このリーダーをやるんだという時に、前回すんだところ、あるいは前々回でもけっこう、前回すんだところのアンダーラインを引って張ったところを五分間位、せいぜい七、八分、一遍おさらいをして、それから先へいきなさい。前のところで済んだ単語のおさらいをして先へいきなさい。その際に必ず目を使って、それから口を使っていく。ということとは耳を使っていく。

次に、もう一つ大事なことは、必ず書いていきなさい。こたつで手を出すのはいやだからと、口でこうやってページをあける……。こんなことをしたんじゃ駄目だから、ちゃんとう書いていきなさい。勉強に不精は禁物だから、必ず書くことにしなさい。それからあいているところがあつたら、二度でも三度でも書いていきなさい。それから電車の中でも勉強したいというなら、こんな単語の帳面でも見ていくというのが、一番あたりさわりがなくていいんじゃないか……。学校のを生かしていきなさい。学校で使っているものをどんだん生かしていきなさい。それから家でどんだん字引を引いていきなさい。偉い先生方ほど字引はよく引いておられる。

それからもう一つ、英作文のうち、一でも二でもけっこうだから、エーだいたい二十五課あるはずだから、一課に三題の例題がついている、そうすると一冊に七十五題の例題がついている、七十五題だけやりなさい。一週間に三課位やっていってごらんください。一日三題覚えていきなさい。すると一週間に九題できるわけで、そうすると二十五課あるわけだから、どの位で終るのかしら。じき終ってしまうわけだ。そしたらまたもう一遍はじめなさい。すんだら又はじめなさい。何遍でもけっこうだから。

(昭和四十年五月十一日)

### 三 国語の勉強法

あなたがたがどうも軽視して困るのは、国語や漢文を粗末にして困る、ということ。是非これはしっかりやってもらいたい。エーこういうことをかって話したことがある。現代文にくらべて古文の方が暗記する面が多いから、棒を引つ張っておいて、英語の場合と同じように、棒線のところを必ず、これから先をやるんだという時に復習をしてから先へいく……。いってみたら復習もやれる、先もやっていると、分析の仕方は専門の先生のおっしゃるようにやっていると、こういう線を入れてみたらどうだろうか、ということ。あなたも、しっかりやって下さいよ。軽視をしないように。

(昭和四十年五月十一日)

### 四 社会・理科の勉強法

社会と理科。覚えなくてもいいやり方。その位のつもりでやっていきなさいよ。さっき、二つのベースとっておいた。学校ベースと自分ベースとこういっておいた。たとえばここから始めるとしたら、十頁、十五頁と読んでみなさい。と、そんなこと先生できやしませんよ、とこうくる。忘れてもいいから、覚えられなくてもいいから、十五頁位読みなさい、とこういうこと。実際に十五頁といたって、半分しかないんだから……。絵がこう

入っている。あそここのところにこういう写真があった、あの写真の下に書いてあった、と  
こういう風になるから、それで覚えちゃう。

忘れてもいいと思ってやってみなさいよ。勉強の場合に、覚えなきゃいけない、覚えな  
きゃいけないという勉強は、苦しくてやれないから。忘れたら忘れたでいいと、少し度胸  
を出していきなさい。こんないい勉強はありゃしない。これを忘れる勉強方法——やがて達  
するだろうということ……。それで、十五頁位まで読んでしまいなさい。

これ、時間にして十五分か二十分。いったいいつやろうか。これ学校へ朝早く来て読ん  
でしまいなさい。そしたらこれ、いつでもやれるんじゃないか。そういう風に時間をうま  
く使っていきなさい。

(昭和四十年五月十一日)

## 第四部 柴田 治先生の思い出

——戸山高校昭和三十一年卒——

## 「私の人生とガンマー先生」

飯塚雅視

早いもので、昭和三十一年に戸山高校を卒業してから、今年で三十一年になります。柴田先生（以下「ガンマー」先生と呼ばせて頂きます。）には、三年の担任として御指導頂きましたが、四中時代からの名物先生としてそのキビシサを鳴物入りで聞いていましたので、初めはオッカナビックリで様子をうかがっていました。しかし案ずる程のことはなく「ガンマー」という名から来る威圧感とはほど遠く、どちらかという人当りの柔らかいオジサンという印象で親しみを感じたように記憶しています。私が数学より英語が苦手だったからでしょうか、むしろ「ブル（藤村）」先生の方がオソロシク、机のそばを歩きながら「エッ、ツギッ」と言われると身が縮む思いをしましたが、「ガンマー」先生に問題を当てられてもその出来、不出来にかかわらずそれほどのプレッシャーを感じませんでした。「ガンマー」先生には、私の進学問題で特に世話になりました。私が防衛大学校に入り現在航空自衛隊のパイロットとして勤務しているのも「ガンマー」先生のお力添えによるものであり感謝しております。

母の祖父が陸軍士官学校の校長をされており軍人の血を引いていたからでしょうか、私は防衛大学校に入校を希望していました。しかしながら、母は、軍人、特に陸軍は野暮った

くて嫌いであり私の意見とは反対でした。そこで母は、担任の「ガンマー」先生のところに相談に行ったのですが、その時先生は、何と「良いじゃないですか。防衛大学校に入ることは結構じゃないですか。」と積極的に賛意を表されたので、母もその気になって私の人生の進路が定った訳です。その当時、教育関係者は左傾向の人が多かったので、母は「ガンマー」先生が反対してくれるのではないかと考えていたようですが、あまりにハッキリと賛成されたので、もともと何となく感覚的に反対していたこともあったのでしょう。あっさりと考え直してくれました。

このような訳で、「ガンマー」先生には大変お世話になりましたが、卒業後は東京から離れ地方を転々としていましたので、年賀状で年に一度御挨拶をする程度で失礼をしていました。たまにクラス会でお目にかかれた時には、「頑張りなさいよ。」という励ましの言葉とともに、航空事故が時々起きるからでしょうか「気をつけなさいよ。」と御心遣いを頂き恐縮するとともに有難く思っていました。先生がお亡くなりになった時は、市ヶ谷基地で幹部学校に勤務しており、柄にもなく教官稼業（航空戦略・航空作戦）をやっていたのですが、たまたま私が主担当である応用研究の最中であり校外に出られず残念ながら葬儀にも参列できませんでした。現在は三沢基地で警戒航空隊副司令として勤務していますが、生前の御指導に感謝しつつ北の空から先生の御冥福をお祈り申し上げます。

## 柴田先生の思い出

磯野 裕子

戸山高校で通した三年間のうち、最後の一年は緊張の連続だったように思います。高校生活にも慣れた二年生の時がとても楽しい一年間だったので、その反動でますます感じるのでしょうか？ 今から思うと何故あのように緊張した毎日を送らなければならなかったか不思議に思うほどですが、やはり柴田先生のクラスだったからというのが一番大きな原因でしょう。私は数学は好きで、結構、真面目に勉強もしていたのですが柴田先生の授業ではいつも指されなければいいなと小さくなっていました。たまたま黒板の前に出され、計算ミスをしたりしますと、「こわいよ。こわいよ。こういうミスが大きな結果を生むのだよ。」といわれ、その口調が今でも聞こえてくるようです。先生の授業は厳しい一方でとても熱心でわかり易く、数列の計算の工夫、極限から積分への流れなどなるほどと講義に聴きほれ、ますます数学に対して目が開かれていったように思います。

先生は授業以外のことについてもいろいろ注意されましたが、今なつかしく思い出すのはいわゆる早弁についての注意です。「お母さんが心をこめて作って下さったお弁当は、昼休みによく味わって食べるものだよ。」と言っておられました。今は私が息子に言っておりますが、母親本人が言ったのではあまり効き目もないようです。又、女子生徒には、

新宿あたりを夕方五時過ぎにうろろしないようになどおっしゃっていましたが、その

せいか、今でも夜暗くなつてから盛り場を歩くのは苦手です。

今、専業主婦としてぬるま湯につかっているような毎日を送っている私は、「そういう生き方でいいのか？」「勉強は続けているのだろうか？」という先生のお声が聞こえてくるようです。これからもずっと先生は私の心の中では生き続け、見守り、激励して下さい。ことでしょう。

## 夏の夜の夢

浦上 忠臣

夜の小田急線、新宿駅。特に帰りを急いでいなかった私は、冷房の良くきいた電車に乗ろうと、鈍行の乗場に歩を進めた。ホームには既に電車が止まっており、中はガラガラだった。いつものくせで、後から二両目に乗り込み、さて坐わろうと前を見ると、なんとそこに黒っぽいスーツに身を包み、背すじを伸ばし、目をとじて、われらが恩師、柴田先生が坐わっているではないか。昔のくせで「アッ、ヤバイ。ガンマだ!!」と思ったが、今はなにも恐れることはない。卒業して三十年以上になる。



「柴田先生、今晚は。ご無沙汰してます」私は静かに声をかけて、おじきをして、先生の横に坐わった。

「あゝ、浦上君だね。どうだい？ 元気かい？」いつもの調子の、なつかしい声だ。

「えゝ、お陰さまで、まあなんとか元気にやっています。この春、娘が、去年のクラス会の時戸山に行っているとお話した娘が、一浪して東大の理二に入ってくれましたので、こっちはまあなんとか一息ついたような……」

「ほう大したもんだねエ。お父さんとは大変なちがいだねエー。しかし君もなんだろう？ 灘高から転校して来た時とても悩んでいたけれど、本当は東大狙いだったんだろう？ あの頃ご両親も困ってましたよ」

「もうそんな昔の話はよしましょうよ。その辺のことは先生が一番良くご存知なんです。僕は高二の時編入してきて三年間も先生に数学を教えていただいたんですから……」

「教えがいが無かったと云うことかい？ しかし君のご両親も、早かったねエー」

「えゝ、母は東京オリンピックの最中に五十四才で、その時僕は二十七でした。父は昭和四十三年の九月、五十八でした……」

「で、今はどこに居るんだい？ いつぞやは札幌にも居たことがあったねエー」

「えゝ、四年前までの三年間札幌にいました、今年の四月から岡山勤務です。中国四国

支店というのが岡山にあるんです」

「勿論、なんだろう？ 支店長だろうけど、中国四国と云うと広いねえー。仕事は面白いのかい？」

「エ々、まあなんと云いますか。えーと……」

「エートは八だよ。九<sup>ママ</sup>労してるんだらう？」

「まあ人並以上に苦労だけはさせてもらっています。この円高で輸出がガタガタですから電車はとくに新宿を発車しているが、今どこを走っているんだらう。先生との話に夢中になっていてうっかりしていたけれども、下北沢はまだなんだらうか。先生はたしか経堂だったか……」

「先生、僕はねえ、札幌に居た頃自分で弁当をつくって会社に持って行ったんですよ」

「ホーッ、えらいねエー。しかし、なんだろう、あれはお母さんとかお嫁さんの、お子さんとかご主人に対する愛情のコンデンスなんだろう？」

「先生はよくそうおっしゃってましたねえー。そうすると僕の場合は自己愛と云うことですねえー。外食に飽きたので、あまった材料で栄養のことを考えながらパックしただけなんですけどね。その方が安上りなんですよ」

車窓から見える物は何もなく、電車は真暗闇の中を走っている。私は次第に不安にな

ってきた。車内の冷房はよくきいていて寒いくらいなのだが、照明がなんだかいつもとちがう。うす暗いのだ。先生はおつかれになったのか眼を閉じていらっしやる。

電車が鉄橋を渡った。「多摩川かな？」と思ったがどうも様子がちがう。

「先生!!」私はこわごわ先生の方に身体を寄せると……

「今の川は一途の川だよ。」先生がニヤリと笑う。

「エーッ? 一途の川?」

「あまり知られてはないがね、生きている時に心に余裕がなくて、自分のことばかり一途に生きてきた人は、この川から歩いて渡らねばならないんだそうだよ。」

私はソーツと首を伸ばして外を見たが何も見えない。相当巾の広い川だ。電車は一途の川を渡り終り、つづいて小さな川を渡って次第にスピードを落した。

「今の小さな川が二途川、ここでは中川と呼んでいるがね。そしてこの先が三途の川だ。どうだい? 君も渡るかい?」先生が再びニヤリと笑って、云った。

これは大変なことになったぞ。えらいところに来てしまった。一体なんだ、この電車は? 納涼電車か?

「そんなに心配することはないよ。電車を降りたら反対側から光の玉が来るから、その中に飛び込むんだねェー」

「セ、セ、センセイは?」

電車を降りると大変な暑さだ。ものすごく胸苦しい。

「自分はこのままあっちへ行くことに……」先生は暗闇の中を指差し、一度背のびをして、その中に姿を消した。その後姿に手を合せているうちに大きな光の玉がやって来た。私は迷うことなくその中に身を投じた……

「安眠タイマー三時間」にセットしておいた冷房が切れて、すっかり汗まみれになった私の胸の上で、猫が大きく背伸びをしていた。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

### 柴田先生の思い出

岡田恒明

昭和六十年四月四日（現地時間）の真夜中サンフランシスコの郊外であるサンノゼのホテルで柴田先生の御逝去の報を受けた。御通夜にも告別式にも出席出来ず、遠い空の下で御冥福をお祈り申し上げた。柴田先生の思い出は私にもいくつもある。しかし、残念ながら褒められた記憶は全く思いつかない。そして、少々感度が鈍かったのかも知れないが、

叱られた記憶もほとんど無いと言って良い。それでいて、先生から言われたこと、教えて戴いたことが、その後の三十年間の人生に、どれ程大きな影響を受けたか計り知れない。早稲田の電気科に入るとき、お許しを得る為に、母親と経堂のお宅に伺った。本人も二浪は少々嫌だったが、母親が二浪反対を申し出たので、さすがの先生も渋々承知をして下さった。日頃、先生が口ぐせのように言われていた『おかあ様を大切に……』を逆手にとったようで、いささか気がひけた。先生からのカウンターパンチは（君のような人間は、大学に入ると勉強しなくなってしまいうに決ってるから）『家庭教師をしなさい』であった。戸山高校の大先輩の御子息の家庭教師（数学）を仰せつかった。幸い生徒の出来が良く、東大に入られたので、ほんの少し恩がえしが出来たような気がしている。

『四当五落』とか『三当四落』とか言われた受験戦争をあまり真面目にやったとは言えないが、勉強のあと熟睡する秘訣を教わった。曰く、『勉強で疲れているのに、眠れない時は外に出て木刀を振ること。すると頭の血が下って良く眠れる。』今は高速道路の下になってしまった、信濃町駅の線路ぎわの国鉄官舎の庭で実行に及んだ。真夜中なので、おまわりさんに注意されたこともあったが、御利益は抜群であった。社会人になり、二十五年もコンピュータの開発、製造に携わっていると諸々のことで、頭に血がのぼり眠れぬことも多い。そのような時は、自然に先生の言葉を思い出し、頭の血を下げ、ストレスを解消

する術を身につけることが出来た。ストレス解消が出来ずにノイローゼになった人、酒で解消して胃や腸をダメにした人が身近にもずい分多い。

毎年一度はお目に掛かる機会がもてたことは幸せだった。その度に言われたことの一つは、『まだ腰は大丈夫かね』であった。車にはかり乗って自分の足で歩かないことを見抜かれていた訳である。四十才を過ぎた頃から腰痛の兆候が現われたのはびっくりさせられたものである。毎回いろいろなお話を聞かせて戴いたが、毎回そのお話が示唆に富み且ついかにも勇気づけられたことか。なかでも常に驚かされるのが、先生の新しい知識へのおとろえを知らぬ意欲であろう。八十才を超えて、尚『ロシア語をはじめたよ……』と聞かされずには、教え子としては発奮せざるを得ない。もうこれからは先生のお話が聞けないと思うと残念でたまらない。三十年間に亘ってお教え戴いた教訓を大切にし、今後の人生に役立てていきたいと思う。

先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

奈良で柴田先生に出会う

太田 敬二

柴田先生の訃報に接したのは、大阪であった。その一年前に大阪へ単身赴任し、また、半年前には養母をなくしたりで公私ともに忙しいときであり、先生の葬儀には出席することができなかった。

先生の教えを受けたのは約三十年前になるが、今もって強烈な印象が残っている。前から怖い先生だと聞いていたので、三年のクラス担当が柴田先生であることを知ったときは、数学が苦手な私だけに、ぞっとしたものである。確かに、先生はその人の能力に応じた厳しい教え方をしていたし、生活面についても、他の先生とは違った厳しい指導があった。反面、やさしく慈悲深いところもあった。例えば、弁当は母親の愛情のコンデンスされたものであるから、よく噛んで味わいながら食べなさいということを、繰返しおっしゃっていた。

私は大阪での二年間の単身赴任中、よく奈良・京都へ独りで出掛けたものである。元来、歴史については関心を持っていたが、努めて古都のお寺を廻ろうと思ったのには、先生の教えの影響があったのも一因といえる。「健康のためによく歩きなさい。勉強ばかりしないで、気分転換のために色々なことをしなさい。」といった高校時代に先生からお聞きした

ことが、卒業後もずっと頭の片隅に残っていて、何としても月一回は、所謂、史跡を歩こうと決心させたのである。

社宅のある西宮市から、高野山・鞍馬山・葛城山等へも行ったが、私が最も強く魅力を感じたのは、自然の中に溶け込んでいる奈良の古い寺院や仏像であった。法隆寺や東大寺・興福寺等の仏像は厳しさと慈悲深さを秘めている。それらをじっと見ていると、三十年前にお会いした頃の先生の姿と妙にイメージが重なってくるのである。今年の三月、転勤で東京へ戻ってきてからも、奈良は心の故郷のような気がする。

「電車賃はいらないよ」

尾崎 英二

三年に進級し、毎年行われる組替えの結果、柴田先生が担任であるH組に決った。一、二年生の時には、先生の授業を受けたこともなく、先生が戸山の名物教師であることも知らずにいたが、同級生からガンマ先生のクラスに決っておめでとうと祝福された。この意味は後日、先生の授業を通して知ることになる。

家庭の事情もあり、春や秋の遠足や、二年の時の修学旅行には参加しなかった。三年の

春の遠足の時、先生に不参加の旨を申し入れたところ、先生は私に事情を聞かれることもなく、いつもと変らない調子で「電車賃はいらないよ。お弁当も持って来なくてもいいんだよ。」と云われた。私は意気込んで先生を職員室にたずねたこともあり、少々意地になつてその時の遠足には加わらなかつたものの、先生の暖かい気持がこちらに伝わり、何かすっきりした気分になつた。夏休み前には、休みの期間中の生活上のアドバイスがあり、英気を養うためには工夫して旅行に出かけなさいということもその一つであつた。そんなこともあり、秋の遠足には自分でも率直な気持で参加することが出来た。

一浪してやっと大学に入学出来たが、当時の学生の多くがそうであつたように、まず解決しなければならぬ問題はアルバイト探しであつた。大学にある学生アルバイトの窓口をたずねたところ、地方出身の学生を優先的に紹介するので、都内居住者は自分で探すようにと云われ、がく然とした。ほとほと困つてしまい、先生を学校にたずねアルバイトの紹介をお願いしたところ、現在は担任を受け持っていないので他の先生に頼んでみるからしばらく待ちなさいとのことであつた。

その後すぐに先生から連絡が入り、一年生担任の春田先生を紹介され、そのクラスのM君の家庭教師をすることが決まり学生生活をスタートすることが出来た。

戸山を卒業して二十年程経つて、城北会の理事会へ年度の幹事として出席することにな

つた。先輩の話の中で先生のことを語られることがあつた。ある先輩は四中に在学中に父親を亡くし、ぼう然自失し、一週間程家に閉じこもつていた時に、先生が見えて「親が子より先に亡くなるのは当然だ。明日から学校に出て来なさい。」の一言で目がさめたこと、又卒業時には君は父親がいないので早く社会に出なければならぬとさとされ、すでに受験料も先生が払い込まれて、手続きが完了しており、それでその大学に入学したのだと感謝の気持で私に語ってくれた。

別の先輩と経堂にある先生のお宅へ伺つたことがあつた。経堂の駅から電話で道順を伺い、世田谷特有のせまい道路を大分進んで、道路に立たれている先生の姿が見えた時は、びっくりもし、恐縮してしまつた。先生は「ここは二股になっており、分りにくいからね。」とはほえまれた。

先生の思い出は色々ありますが、不思議に生徒時代のきびしかった折のことではなく、おだやかでやさしい先生が思い出されます。



八ヶ月間の自宅療養の結果、ブクブクに肥ってしまい、詰襟は着られなくなり、オーバーの下にセーターという恰好で、卒業以来初めて母校に出て来た。人に見られるのが恥しい様な、照れ臭い様な、妙な気持で模擬試験の申込に出て来た所だった。受験失敗を報告に行つて以来手紙も出さず御無沙汰のしっぱなしの僕に対して、ガンマさんは、だまってジーンと見つめて（例のガンマスマイルをたたえながら）……

「よく頑張ったネ、もう安心だよ。」

もう一年浪人しなければいけないという、悲壮な覚悟の僕は、「医者云う通りの安静時間を守って居たものですから、受験勉強は一日一―二時間程度しかやっていません。予備校や補習校でやっていた友達に比べたら、ぜんぜん遅れて居て、二年目も浪人です。」

「現役の三年生の時は、受験勉強専門にやってた浪人と一緒に模擬テストをやつた時はそんな弱音は、吐かなかつたね。家で病氣と斗つて健康をとり戻せたことが、一番の自信につながるよ。」とガンマさんに云われ、ジーンと見つめられているうちに、「いける、やってみよう」という気になれた。

その直後の模擬試験の結果は予想通り、かなり悪かつたが、ぜんぜん気にならず、高校

時代の教科書やO社の受験参考書の見直しが残された二ヶ月間の受験勉強だった。あの時ガンマさんに会つて、闘病生活を克服した事で勇気づけられた点、折に触れて思い出す。それと同時に、ガンマスマイル（と僕は名付けたのだけれど）をたたえた目で「ジーンと」見詰められる……ついつい催眠術にでもかかった様な気がして、抵抗したいけど、フラフラとガンマさんの話術の虜になつてしまふ……その状態を思い出すのは僕だけだろうか。

## 柴田先生の思い出

君川 治

わずか一年間の担任、柴田先生の数学の授業もそれ程多く受けたと云う記憶もない。しかし、卒業して三十年たった今も、戸山高校の教室での授業風景をハッキリと思い出せる先生が何人かいる。柴田先生もその一人だ。

三日の同級の某君と同様、遅刻の多かつた小生、遅刻でおこられるの嫌さに欠席も増加したある日、先生に呼ばれた。普段と違ってやさしく欠席の理由を問われ、「頭痛が多い」と言つと、毎日三十分以上散歩することを奨めてくれた。それ以来、顔を会わせると「散歩をしているかい」と聞かれて意味あり気にニコツとする。心の中をのぞかれている気が

してそれ以来、本当に散歩をするようになった。今でも疲れた時とか、何かゆっくり考え事をする時には歩くことにしている。歩くことのすばらしさを教えてくれた柴田先生に感謝すること誠に大である。

### 数学の大嫌いだった女の子の目から

木村裕子

多くの同窓の方々のようには恩義を先生に感じてないのを日頃、申訳なく思っておりましたが、先生のお亡くなりになった折、日を改めて御遺族宅をお訪ねさせて頂き、未亡人にお目にかゝる機会を得ました。奥様が先生を語るお言葉の一つ一つは私には「ギョッ!」とするような驚きでした。

「食べ物の好き嫌いがはげしくて甘いものは大好きで、おまんじゅうなどいくつでも食べてしまうのです。野菜はきらいでしたね」

「ガスに火もつけられない人でした」

「趣味と云いまししょうかラジオやテレビで英会話の勉強をするのが好きでした」等々。これらのお話は学校での先生を知る私には意外なことでした。

私達には「お母さんの作ったものなら何でも食べなよ。お母さんの作ったお弁当を食べなさいよ」「お父さん、お母さん、先輩の云うことは良く聞いて」と道徳律の先生という感じであったことを私は記憶するのです。だから多感な頃の私でしたので、それらに反抗して、なるべく耳にそれらが残らぬように、心を空っぽにするように努めていたものでした。

こんなに遅くなつてではありますが先生が生身の人間であることを実感しました。それは私には先生は彫像のように見えて生身が感じられませんでした。

私は数学が大嫌いだったので、先生の授業ではまるっきりお客さまでした。でも今、私自身が教師となり、職業的見方をしますと先生はお客さまの扱いかたとても上手だったことです。私にも答の出せる超やさしい問題を与えて下さり、その答を黒板にかかせるのですが恥をかかせないようにして下さいました。プライドを傷つけないような処置を下さいました。今考えると女の子の扱いには慣れていらっしやらなかったようですから相当お氣を使われたことでしょう。お客さま生徒に劣等感を持たせないということは大変難しいことです。

私は先生を思い出す時いつも「おじいちゃん」と「孫娘」の關係を感じるので。おじいちゃんはいつもやさしくて、きびしく育てる必要はないのです。私の場合はそれでよか



ったのです。私には進学の際に英文科に進みましたので数学の成績は関係なかったのです。男子生徒は先生をきびしいと云い、そう先輩から云い伝えられてきました。が私には全然それはピンとこないのです。

実生活では私は末娘で祖父母の顔を知らないものですから、なんとなく「おじいちゃん」とは先生みたいな人でしようと思いつけてきました。

親不孝な私は卒業後も先生をお訪ねするでもなく同窓会の折に御挨拶する程度でした。でも遂に最後の折、御遺族をお訪ねしたい気持ちになりました。私には先生の実体がそれ迄、感じられなかったのです。そして未亡人のお話は先生の実体そのものを示して下さいました。私にはやっと何かがつかめたのです。こんなに遅く、もうどうにもならない時になって。

そして私自身が見えてきたのです。

生ある先生を幻のように扱い、その最後の時になって先生に人間を感じたという「のろまさ」かげんです。私の人生いつもそうだったということなのです。

男子生徒とは全然ちがった先生の見方が、数学の大嫌いな一人の女の子にはあったのです。

## 迷い込んだ駄犬

斎藤孝典

この学校での長い教職生活の中で、今迄あまり例を見ないケースである。

殆どの生徒は、この学校に入った時点、と言うより、この学校を志望した時から、進学目標とする大学は決っており、その目標に向かって勉強している。中には、しっかりと将来の進路迄、見据えている者もいる。

そんな中で、この生徒だけは、目標も定かではなく、大して勉強をしている様子もない。本当の勉強の仕方が解っていないようでもある。

どうも、この学校に迷い込んで来たような感じだ。

受験期が近づいても、大した進路相談もない。内申書を頼みに来た時、提出先はW大、K大、N大だと言うことであった。その折、申し訳程度に『国公立は何処なら宜しいでしょうか。』と言うのである。

『T大（東大ではない）なら良いのではないか。』と返事すると、

『では、そこもお願いします。』と言う程度である。全くの進学音痴と言えそうだ。

こんな具合で、この生徒の将来は大丈夫であろうか……。

しかし、本当にN大を受けるのであろうか。念の為、N大用の内申書は宛名を書かずに

置き、取りに来た時、念を押してから、ペン書きで書こう。

卒業後、時々自宅を訪ずねて来るが、顔を見る都度、『この生徒が戸山高校を選んだ理由は何だったのだろうか……』との思いが胸を過ぎるのである。

卒業後三十年近く経って、最後に訪ねて来た折、遂に

『君が戸山高校を選んだ理由は何だったのですか。……』

何かと先生にはご心配を掛けどおしのようでした。

## 柴田先生

坂本淑子

柴田先生、何ともなつかしく、暖かいひびきです。クラス会の出席率が高かったのも、先生のお人柄の由縁だったのでしょう。

デキノワルカッタコはクラス会に参加しても遠くで先生を拝見し、お声を聞いているだけでも和やかな気分になれたのです。でも、先生はきつとお声をかけて下さいました。年を重ねるたびに先生をなつかしく感じる気持は募りました。自分でも不思議な気がいたします。三年生になっての組替えの時、親しかった友と離され私一人が何故ガンマー先生の

クラスに入れられたのか歎いたものでしたのに。

先生には弟の進学についても御助言をいただきました。その折バイオリズムなるコトバを先生のお口から聞かされびっくりいたしました。その反面、先生はガスの火もつける事がお出来にならなかったとの事、何かほのぼのと暖かく嬉しくなるようなお話でした。

先生の御冥福を祈りつゝ、またどこかで、お目にかかれるものならと、つくづくと先生のあたくさを懐かしく思い出しております。

## 身にしみた教え

佐藤弘輔

仕事柄、毎日がいろいろな数字に埋められた書類に目を通す生活である。コンピュータが普及したお蔭で、きれいで読みやすいが機械的でなんとなく味気ないものである。それでも全く手書きの数字がなくなつたわけでなく、職場の人々が書く数字は書体を見れば誰が書いたのかすぐにその人の顔が目にかぶ。毎年四月、新入行員が配属されてくると眼はいやでもまず本人達の書く数字にいつてしまう。

話は三十年前の高校時代にさかのぼる。四月某日、クラス担任S先生の数学テストがあ

った。問題全部に自信を持って解答した。だが返された答案用紙は全くの意に反し点数は0点、しかも解答の一つ一つに○×の判定さえもなかった。授業が終るのももどかしく「先生！答は全部合っています。何故0点なのですか」と不満をぶつけた。「たぶん君の言う通り答えは合っているかもしれない。しかし目が悪いので自分には読めない。」あとは何を言っても全くの無言で取合ってくれない。

最古参の世に言う名物先生、あだ名はギリシャ文字の「ガンマ」、意味は「頑固の魔王」である。あらためてそのゆえんを肌で感じた。その後反省どころか悔やしさと反撥心のみでテストに臨んでいた八ヶ月は、結果はいつも不安定で納得がかなかった。年があけて、さすがに先生にきちんと採点して頂ける答案を書こうとの気になり、テストに臨んだ。数字は心をこめて、自分なりにきれいに書き、解答への過程は全て答案面に残すこと徹底して実行した。結果は不思議と毎回満足のいくものであった。

自分にとってこの体験は、今もなお仕事に臨む心の原点になっている。苦しい時ほど「先輩の教えに謙虚で素直に、プロセスを大切に、一生懸命に努力すべし」と常々自分に言い聞かせている。

昨年四月、先生の米寿を祝うクラス会が開かれた。「先生、0点の答案覚えておられますか」、「覚えていますよ」。

今年の新人に、「基本には謙虚で素直であること、数字は心をこめてきれいに書くこと」の二つについて話をした。行員教育の責任者として、日頃指導している事柄が、将来、本人にとって大きく育つ財産のよき種であらんことを願う今日このごろである。

以上は名古屋在勤当時、ライオンズクラブからの依頼で投稿したのですが、入行三年目にきびしく指導を受け、銀行員生活での恩人と感謝している先輩に、はじめて稟議書を提出したとき、「これが上司に提出する書類か」とつき返されました。その時、ハッと先生の教えを思い出し、以来忘れたことがありません。先生にめぐり合えたことは自分の一生にとって、最大の幸運でした。授業の時の神々しいまでのきびしいお顔とお宅にお邪魔した折の温顔がいまも眼にうかびます。ご冥福を心からお祈りします。合掌。

## 先生の思い出

鈴木良之

理由はともかく、結果として、在学中は言うに及ばず、卒業後も先生を避けるかのようにして過ぎてきた私にとって、先生の思い出を記すことは難かしい。ただ一昨年、米寿をお祝して開催された三日クラス会の幹事を縁あってお受けした。その夜は先生の隣の席

で、かなり長い時間お話をすることができ、大いに昔を懐かしんだ。このようなことは、卒業後、初めてのことであり、今となっては、せめてもの救いである。

私が大学受験の進路を決めるにあたって、先生に相談に伺った時のことであるが、

「君はお役人のタイプではないよ。一ツ橋を選んだらどう？」

と言われた話を申し上げたら、しばらくケゲンな顔をされ

「全く記憶が無い。本当にそんな事を申し上げたかしら……」

と困った顔をされ、続けて

「大蔵省に行ったら、ついでの時に平沢さんを訪ねてごらん。」

とアドバイスして下さった。こうした話の背景はともかくとして、またしても、先生の助言を実行しないでいる。

考えてみれば、先生が私共を教えて下さったのは、今から三十年前、五十才台後半の頃であったと思う。これから先、十年を経ずして私もその年令に近づこうとしているが、親父の厳しさと、青年に負けない情熱をもって、生徒ならぬ同僚、後輩に接し得るかどうか、先生の域に一步でも近づくべく、心機一転、頑張りたいものである。

## 柴田先生へのお礼

高橋棟作

最近やっと自分の子供が高校生になり、彼等の生活を通して、自分の高校時代を見る事が出来る様になりました。もともと、「御両親の時代とは別の考え方をしませんと。」と言われて溜息をついて居ります。

そこで、ふと思うのですが、柴田先生は、四中戸山で長い間教鞭をとられ、幾度とない入試制度の変更やら、時代風潮の変化、更に最大のものとして、六三制の開始を経験して居られるわけですが、先生御自身から「時代が変わった」とか、「かってこうであったことがあった」と言うお話しは何うことがありませんでした。社会全体が目的のため一丸となった時代も、百花齊放の時代も、先生は超越して居られた様です。

柴田先生の、鉄壁の如き圧力に威圧され、営々と繰り返しの演習をしたお蔭で、息子の「数I」の宿題で少々面目をほどこすことができました。「御両親の時代とは別の時代」でもありますし、科学的トレーニングをしないと、オリンピックにも勝てない時代なのであります。柴田先生の体現された、「営々たる繰り返し」と「過去を言わない」とは、大変素晴らしいお教えであったと思います。

幹事の方々が与えて下さった機会に、あらためて、御礼を申し上げたいと思います。

「柴田先生、まことに有難うございました」

### 先生の遺産を大切に生きて

手塚和昌

柴田先生との出会いは、二年の時、三角函数を教えて頂いたことに始まる。確か週二時間だったと思う。授業中に渡辺邦守君と時計の受け渡しをして取り上げられ、職員室に謝りに行ったことをはじめ、ろくな想い出しか残っていないが、極め付きは試験の時である。試験官がガンマーであった。どういうわけか始まって十分も経たぬうちに、背後から先生が私の答案をのぞきこまれた。私はカーツとして手がこわばり思うように動かない。焦れば焦るほど頭も空廻り。カンニングするとも思われたのか、二、三十分立っておられたような気がする。結果は惨たんたるものであった。四十点という高校時代のワースト記録を作った。

先生の覚えもめでたくなく、私も早く先生から逃れたい一心であった。

ところが三年のクラス替えが発表になると、何と柴田先生が担任であった。始業式の日から長いお説教があり、他のクラスが皆帰ってもわがクラスだけは終らなかつた。ツイテ

ナイというのが卒直な処であったが、二回、三回とお話をうかがい、ガンマニズムを叩きこまれるうちに、これはなかなか大変な先生だということが分ってきた。最近は云うまでもないが、当時でも高校の先生でこれほど親身になって文字どおり教育に打込む人はいなかつた。勿論、またかとうんざりしたことも度々あつたが……

先生の薫陶を受けて、今でも他人に誇れることがひとつある。受験を前にして一年間、一日も欠かさず散歩を続けたことである。夕食後二、三十分。ルートはその日の気分次第、気の向くまゝにバリキューションを加えるので、変化には富んでいたが、雨が降っても、雪が降ってもバカの一つ覚えのように続けた。当時、舗装も十分でなく、雨が降るとぬかるむような道もあつたが、長靴をはき、傘をさして歩きまわつた。

このことは、一旦決めたことは必ず実行するという根性みたいなものを植え付けてくれた。今でもこの時の経験が心の支えとなりいろいろな面で役立ってくれる。先生の遺産としてこれからも大切にしていきたい。もっとも子供達には、度々引用するのでイヤがられてはいるが……

大学時代のアルバイト、社会人になってからのアドバイス、そしていろいろな場に出会った諸先輩には、ガンマーという共通のアイドル？をもったことから、それこそ親身になつてお世話を受けたり、ご指導を頂くことができた。それもこれも先生のお蔭である。

先生が亡くなられたことはまことに残念であるが、これも世のならい。今はたゞ生前のご恩に感謝し、ご冥福を心からお祈りするのみである。

### 柴田先生のお顔に観たもの

中 村 友太郎

ここ一年ほどの間に私たちも、論語に云う天命を知る時節を迎える年頃となりましたが、私どもが初めてお目にかかった頃の柴田先生は、すでにその五十の境を越えておられました。ですから、当時の先生の年齢にようやく近づきかけた私などがあの頃のご容貌に感じ入ったことなど文面に表わすのは、大変失礼なことにも思われます。しかしながら、それを承知の上で、やはりここでそのことに触れさせていただくのは、先生についての小生の率直な思い出にとって、それは欠くことのできないリアリティだからです。他の諸兄姉にとってと同様に、のちのちの私の生き方にこだました先生のお言葉も多々ありますが、それらの焦点として、先生の面影に結びついた一塊の強烈な印象、ここに人間教師ありとの印象を忘れることはできません。

先生との初めての出会いは、あとでクラス担任になっていたことなど思いもよらな

かった一年時のある日のことでした。何の科目かは忘れましたが、担当教員が休みで自習時間であったと思いますが、皆でワイワイ賑やかに騒いでいた教室の戸が急にガラリと開いて、踏み込んでこられた年輩の方の峻厳な顔。その気魄に押されて一同静まりかえる中で、諄諄とお叱りの言葉が流れ出すそのお顔に、小生の心は何やら深く釘づけにされたのを今もありありと覚えています。私ども若僧には及びもつかない洞察力で事態を丸々捉えた上でかかわっておられる静かな物腰に言いようのない畏怖を感じたとでも言いましょうか。その後在学中のさまざまな機会に、また卒業後の三日クラス会の折々にも、年月の移りかわりとは無関係に、先生のお顔は、私にとって変わることはない重厚な印象を与え続けました。それゆえ一昨年、海外での旅路にあって、それとも知らずイベリア半島から絵葉書に一筆した時も、また大変遅くなってご訃報に接してなつかしくお姿を想起させていただいた折も、昔ながらの印象を心新たに味わったものでした。

「額の上に恥ずかしさが現われないように役者が仮面をかぶるのと同様に、私は世界という劇場に、仮面をつけて足を踏み入れる」。これは近代思想および近代数学の父であるデカルトのことばですが、柴田先生ご担当の「解析」の教科書で見かけたこの思想家の肖像を先生の面影とよく似ていると勝手に結びつけてしまった小生は、いつの頃からか、先の言葉を柴田先生のお顔から聴き取っても不思議ではないように思い込んでしまったよう

す。ともあれ、どんなに厳しい叱責のお顔をさし向けられても、父親の慈愛を隠すことのできないお人柄である位は、すでに高校生の私たちにもそれなりに理解できましたが、先生のご生涯の能面が包み込んでいたその幽玄さは、私どもの年輪が重なるにつれて、いっそう深まり謎めいていくようです。

## 柴田先生

永野康雄

追悼文集の一端に是非とも参加させてほしいと願いながら、なかなか書き出すことができませんでした。教室での思い出のいくつかは、はっきりと覚えていますが、もっと申し上げたい何かのうちにあり、それを表現する力が足りずに困っています。

先生のことを考えると、どうも肩に力が入って思わず知らず身構えてしまうのです。私にとって柴田先生は今でもそんな存在なのです。尊敬というよりもっと身近にあって怖かった。叱られることが嫌だったのではなく、自分の生活態度の全体についての反省を求められているようで、息をつめて先生のお話をうかがっていたように思います。

ノートは取るな、予習は完璧に、消しゴムは使わず間違いは後で点検できるようにせよ、計算も答案を書くのと同じようにきちんと記せ。どれもこれも、十六、七才の子供には大きなショックでした。加えて、毎日配られたガリ版の問題集、厳しい授業とくれば真面目にぶつかって行く限りたいていの子供が緊張するのも当然でしょう。補習科を通じて二年間しっかりと教えていただくうちに、ひとつの気持のありよう、たとえば生真面目コンプレックスとでも云うようなものが育ったのではないのでしょうか。いつも、ある基準（何ごとにも精一杯の努力をするというような）が忘れられず、思い切って破目を外すことができな。世の中を上手に泳いでいる連中を羨ましいと思いつつも批判的に眺めている。世渡りが下手でも良いではないか、そんなことは考えまいと、子供の頃のま、でもうすぐ五十才になってしまいます。

私は何だか答案用紙に向っているような気持になっています。追悼文集に載った答案を先生に採点され、皆の前で講評を受けるのではないかと妙な気分です。筆不精の云い訳にさせてもらえば、先生の思い出を書こうとすると、こんな気持になるのが判っているから無意識のうちに原稿用紙から遠ざかっていたのかも知れません。しかし、いやであろうと無かろうと、先生は私の心の中にしっかりと腰を落ちつけていらっしやいます。そして、時おりお叱りを受けるのです。合掌。

## 故柴田先生の「思い出」

野崎 三夫

一番最後に柴田先生にお目に掛ったのは何時だったか、もうはっきりした記憶がありませんが、確かお茶の水あたりの料理屋での同窓会だった様に思います。

こうして改めて記憶を辿ると、その時のお元気な姿がふと目に浮びます。

柴田先生はそのご生涯で何人の生徒に接しられたか想像も出来ませんし、我々三日の生徒のご記憶も、先生にしてみれば、わずかの一点にすぎなかった筈です。

ましてや小生なぞ、高校の時には目立たない存在で、そのうえ社会に出てからはニューヨークとか香港とかに駐在していたこともあって、同窓会への出席率も極めて悪く、殆ど先生のご記憶から忘れ去られて当然と覚悟しておりました。

ところが今から四年前の夏、その時は香港に駐在しておりましたが、先生から「しっかりやる様に、期待しているよ」というお便りをいただき恐縮したことを思い出します。

昔と変らぬ一字一字丁寧な字で、その時はまだまだお元気と安心しておりましたが、それから三年後にお亡くなりになるなぞ想像も出来ませんでした。

二年前に香港から帰国し、香港での経験を生かして自分で輸出入の仕事を始めましたが、少し仕事の方が落ち着いてからは是非お目に掛ろうと思っっているうちに、遂にその機会も無

く本当に残念に思っています。

この事があってからは、自分がお目に掛り度いと思っただご高齢の方には、思い出した時に出掛けることにしています。

高校の時の先生のお教えで、社会に出てからも念頭に置いていることが一つあります。それは「物事をやるには、ゆっくりでもいいから一步一步着実にやり、見直し又はやり直しはするな」という例の先生の黒板での数学の解き方です。親になって、子供達にも同じ事を注意していますが、親譲りのそそかしさでの「うっかりミス」を嘆くのは仕様が無いにしても、実社会に出たらどんなミスも許されないのは事実です。

教壇での柴田先生を思い浮べるに、あれだけ自信を持って生徒を押えつける事が出来る学校の先生が今居るでしょうか。また、あれだけ生徒一人一人の事を克明に記憶し、実社会に出てからも、その活躍を喜んでくれる先生が今居るでしょうか。

柴田先生は、生徒である我々に対するお立場と、社会人である我々に対するお立場とを厳密に区別されて、本当の意味で教え子に対する愛情を持って常に接して来られたことが、今になってみるとよく分ります。

柴田先生のご冥福をお祈り申し上げます。



「エイトは8だよ」

比田 宏

父と子が同じ先生に担任して頂くといい、今の公立高校では考えられないケースで、ガンマ先生にはことのほかお世話になりました。

実際に教える受けるまでは、「四中精神の押しつけ」とか「詰め込み主義」とか、勝手なイメージを作り上げて反撥していたのですが、それが全く見当外れであることが分りました。緊張の中にもユーモアを交えた名授業で、例えば、名指されて答える時に「エー」と言えば黒板に「8」と書かれ、「エイトは8だよ」と言われたり、また、返された答案に丸がつけてあるのに減点されているので疑問に思っていると、「その丸は小さい丸で、これではコマルという意味だよ」といった具合でした。

お年を召してからもまだ原書をお読みであることを話されたり、「そんなベラボーな話はありませんよ」とか「そんな人はやめちまいなさい」とか、江戸っ子口調で叱られたことが、今も耳に残ります。

生活の細部にわたるご指導があり、当時はいささか閉口した記憶がありますが、一人一人の生徒のためを思われる先生の気迫と熱情には頭が下がり、知らず知らずのうちに深い影響を受けました。

今、家の息子どもに、私はよく先生の言葉をお借りして言ってやります。

「朝ごはんがおいしく頂けるような生活をしなさい。」

「お母様のお弁当からは慈愛の湯気が立ち昇る。パンなんて、ありゃ殆ど空気だよ。」

「若い時はあめ玉ではなくこんぺいとうになりなさい。角があるから大きくなるんだよ。」

先生、有難うございました。

## ガンマのいないクラス会

平塚 裕康

昭和六〇年のガンマ会は、五月に行われる予定であった。昭和三一年戸山高校卒業三年目組クラス会、通称ガンマ会は、長い間、三年の時の担任の柴田先生をお呼びして毎年一回開かれていた。前回は、先生の米寿のお祝いに鈴木君が探して来てくれた、江戸職人の手になる行灯をお贈りして、次回は先生のお誕生日の直ぐ後の五月と決めてあった。それが、三月末になっても一向に開催準備の気配がない。我々が勝手にガンマ会事務所と決めている渡辺法律事務所にお問い合わせしようかと思っているところへ、四月四日（木）朝、山本恒夫君から会社に電話があり、先生が昨日亡くなられ、当日がお通夜、翌日が告別式だと

いう。クラス会関係の連絡は渡辺君と相談するよう頼んで、私はガス城北会（勤務先の東京ガスの四中、新制四高、戸山高卒業生の親睦会）関係者への連絡に奔走した。

単に電話連絡といっても、日中は離席、会議中か出張中、夜は接待等で帰宅は遅くなるということが多い、勤務先でも自宅でも案外相手がつかまらないものである。まして急に時間を都合できる人がどれだけいるかと危ぶまれた。それでも、経堂のお宅で行われた告別式では何人も級の友と顔を合わせる事ができたし、ろばさんやおばちゃんにもお目にかかることが出来た。私の担任はねぎもすずめも既に亡く、先生を最後に戸山の担任は、皆他界してしまった。

私が戸山に入学した時、乾燥らつきょうこと平田巧校長が、「中学で優秀な生徒であった君方も、本校では一番から四〇〇番になる。従って、君方は生活を単純化せねばいけない。」と話された。私の戸山志望理由は、中学の先輩が庭球部のマネジャーをしていたこと、戸山のレベルが下手な自分でもやって行けそうだったこと、故に庭球部に入って部生活を楽しめるだろう、と考えたところにあつた。従って、校長先生のお話は、大受験のため以外のことは、できるだけやめるようにとの意味らしいとわかって、とんだ学校に入ってしまったものだと思つた。当時、戸山には四中以来何十年も続けて教壇に立ち、多数の輝ける先輩を送り出し、学校の伝統に自信と誇りを持つ先生が大勢いらした。

そんな中に、ガンマという先生がいて、授業中には鞭を振り、時にはチョークを飛ばすという噂だつた。先生の本名は柴田というのを知つたのは、担任になつてからだつた。

事前の印象が強かつたせいも、受持ちになつてみると、恐れていたほどのことはなかつた。私達を鍛え甲斐がない生徒と見て諦められたのか、男女共学を何年か経験されて教育方針を変えられたのかもしれない。それでも、授業中ノートを取るのには、許されなかつた。それどころか、机の上に教材を一切置けなかつた。先生が問題を黒板に書いて、生徒に解答と解説をさせた。従つて、予習していかないと大変だつた。授業中に時計を見たら、取上げられて、職員室に行かされた。一番まいつたのは、夏休みのハイキングだつた。息抜きに、級友数名とテントを担いで日光から金精峠を越えて丸沼まで一泊二日で遊びに行ったのだ。先生はどうしてこのことをお知りになつたのか、母が呼び出され、これは受験を前に不心得であり、就中私が首謀者であるとして、注意を受けた。

先生の生徒への期待と愛情が、私達の理解を越えたお叱りとなり、鋭い皮肉となつて外に現れたのであろう。ガンマ言行録は、このほか枚挙にいとまがないが、その多くは、先輩が既に書き綴られ、また級友が書き残すであらう。

私が先生にお世話になつたのは、解析の担当として、また担任としての一年間であつた。正確には、先生に内緒で予備校に在籍しながら、補習科に通つていた一年間も含め、二年

間である。卒業以来、今年で三〇年になる。戸山で教えを受けたのはわずか二年間に過ぎないが、その後何十年間もの私の生き方は、先生の影響を受けて来ている。私は、よく二人の娘に、やたらにノートを取るな、予習復習はしっかりやれ、と言ったものだが、その度に、また先生の自慢が始まったとからかわれた。その娘達も中学生になった。

私達のクラスからは、先生の理想とされた日本を代表する人物が生れたとは思えないが、毎年のクラス会に喜んで出席され、張りのある太い声で、私達を教え励まして下さった。以前、高校生の我々に、宝くじを買う人になってはいけない、売る人になりなさいと言われたことがあった。宝くじを取り扱う第一勧業銀行員がいるから、少しは先生のお言葉に応えたことになるだろうか。

いつもクラス会の日取りは、先生のご都合で決った。先生は、戸山の他の会とかちあわなければ何時でもよいと言われたが、先生にはお呼びが多く、我々が先生の最後の担任だったから、全部先輩と言う訳で、日程調整が幹事の苦心のしどころだった。

大勢の教え子があってさぞ大変だったろうに、先生からは、欠かさず年賀状を頂戴した。あれだけ学校でびしびし生徒を鍛え、なおかつ、これ程長い間、慕われるのは、先生のお人柄と、底に潜む愛情があったからに相違ない。長い間お世話になりながらご恩返しらしいことも出来なかったのが、残念でならない。

昭和六〇年のクラス会は、六月一日に、ガンマがいないので、下谷の随徳院のお墓にお参りしてから、近くの鶯仙楼で開かれた。

### 柴田先生の言葉

藤村 豊

三年で柴田先生が担任の時、私はクラスでも最も成績の悪いグループの一人でした。先生も何とかして下さろうと思われ、色々と叱咤激励をいただきましたが一向に良くなりませんでした。最後にとうとう匙を投げられたのか「学校の時の成績が悪くても社会に出て立派にやって居る人は沢山居るよ。例えば……」と色々な例まであげてなぐさめて戴きました。しかも一度ではなく何回か同じ事を言っておられました。後年私も社会に出てから何かあると先生のお顔とこの言葉を想い出し随分勇気づけられ仕事に対して励みが出て、何とか現在やって居れるのは先生のお陰と感謝をして居ります。それにもう一つ、先生は折りにふれて「人の長所と短所はうらおもてのもので、例えば意地っ張りと言えば短所だが意志が強く粘り強いと言えば長所になる」と他の例もあげて話をされて居られました。これも私が人と付き合ったり又は仕事上人を使ったりする場合に随分役に立ち、どんな人とも

付き合うことが出来た、非常に心に残って居る言葉です。  
今回は先生の色々言われた言葉の中で特に私の人生に影響を与えて戴いた事を書いて  
みました。

### 柴田先生の思い出

堀内 公子

一年生の頃の学校は木造二階建て、私の所属したD組は図書館とは鍵の手になった一階の角で職員室が一番近かったように思う。恐らく自習(?)か何かだったのだろう、騒いでいる声を耳にしてとんで来られた先生に厳しく叱られたのが柴田先生にお逢いした最初だった。高校生にもなって騒いで叱られる、当時の戸山の生徒としては異例のことであったように、私達も一瞬にしてシンとなってしまう。あとであれが戸山一の厳しい先生だと聞かされて納得がいったものだった。その先生が担任で、しかもにが手の数学を習うとはついてないと思っただのは三年生の春だった。先生の授業は教科書についてだけ、そして毎週行なわれる小テストは毎回ののように配られるプリントから出るようになってはいやでも毎日数学をおべんきょうしなくてはならない。答案は翌日採点して直され、先生は五四名の生

徒の誰がどういう間違いをしたか迄よく覚えておいでだった。先生も大変だったろうが私(達)も大変だった。

数学をはなれての先生は厳しい中にも暖かく、いろいろな話をされる中に「学校へ来る時は上衣をきちんと着てくるんだよ」、「今朝は靴を磨いてきたかい」、「お母様のおっしゃることをよく聞いているかい」などとよく云われたものだった。そして私達はこれら先生の云われることを忠実にまもっていたように思う。

あまり靴を磨くこともなくなってしまう今、きちんと上衣のボタンをかけ、光った靴をはいて出掛けた時は、気分もさわやかにひきしまったものだったと数々の柴田先生の思い出とともになつかしく思い出す。

### 先生の思い出

丸尾 典正

柴田先生の言葉や、一寸した言いまわしを今でもなつかしく、時にはほろ苦く思い出す。また、つらく恥ずかしい思いも同時にわいてくることもある。

一番傷つき易く、それでいて自信過剰になりがちだった年頃に、秀才の集まる有名校に

入ったばかりに、トップクラスの成績を各科目であげること出来ず、「唯一志望校」にも入れなかった自分としては、複雑な思いがなかなか克服しきれずにいるアノ時代なのだ。もう五〇才に手が届くというのにお恥ずかしいが、高校時代を当時の社会、経済環境の中においてその意味を歴史的にきちんと把握することが未だに出来ないのだ。自分史が書けないのだ。

受験競争、有名校集中、都会集中の競争社会は今でも好きになれないが、当時は特に嫌悪していた。とても参考書など頭に入らない状態で一人悩んでいた。無論それは先生個人の責任ではない。成長発展過程の自分の未熟さによるあせりもあるし家庭の事情にもよる。しかし出来ることなら高校時代をもっと情操豊かにゆっくりと成長したかったし、もっと巾広く社会的視野をもって学びたかったと思う。

卒業後の自分の成長、変革の上で折にふれ思い出す先生の言葉は少なくないが、一、二の例を語りたい。

「セカセカすると早く死んじゃうよ。ホームは走っちゃいけないよ。」とは遅刻常習者へのお叱りの言葉だが、今では子供や若い人に使っているだけでなく自分にも言いきかせているが、連日の深夜帰宅が続くと、郊外都市のタクシーめがけて足早に歩かねばならぬ。しかし階段で他人をおしたり、女性や老人、身障者を追い抜くのはやらないようにしてい

る。馬鹿みたいに当り前の話だが、この原則を守るのは若い頃は案外大変だった。

卒業式の後、教室で「大学へ入ったら赤旗なんかふるんじゃないよ」とさとされたのも、当時は唐突に聞こえたが、意外な程、胸に深く刻み込まれていて、あの激しい六〇年安保の時に、早稲田の政治学科にいながら、遂に学生運動にも加わらず、学生服のデモ隊の大波を、こちらは背広姿で首相官邸の塀の上から眺めていて、後に後輩学生らから難詰された位である。授業拒否のピケを破りひんしゅくを買いながら教室へ出たのに、肝腎の教授が現われなかった事もある。

高校時代の上昇志向を、大学時代は無理矢理下降志向に変換して、授業は殆ど受けず映画館のはしごとパチンコ、酒、アルバイトに明け暮れた挙げ句、最も社会的地位の低かったサービスマン、しかも何も知らない広告界に飛びこんだ。

いくら勧められても組合に入らず早朝から深夜まで仕事一途、遂には同期の足並みを乱すと集会で吊し上げられる破目となった。というわけでここまでは先生の言葉を忠実に、いや虚仮の一念で守って来たわけだ。

ところがどうだ。数百人の同期入社の中で最後の方でやっと一年後に組合加入した僕が間もなく役員となり、今では最年長で、すぐ下が一まわり下という役員会が、このところ何年も続いている。中には息子や娘のような役員も少なくない。けっして不満分子ではな

く仕事は真面目に明るくやっていると自負しているし、仲間も多く取引先にも信頼されていると自負しているし、第一爆弾も作らずゲバ棒もさわったことすらないが、心の中では弱きを助け強きをくじくといつも赤旗をふり続けて早くも四分の一世紀。多分このまま一兵卒としてサラリーマン生活を終えることになりそうで、自分でも不思議な成り行きだと思う。

小学校の担任（故人）、大学のゼミの指導教授（ご健在）と高校の柴田先生には特にお世話になったと今でも感謝しているが、表面的には教えにそむいているようでも自分が生きて来た職場や地域、時代の中では、これが先生の真意を継承発展させた生き方だと思いたい。

先生のご生前、都会の秀才達に対する注文と非秀才、非エリートへの悩み、ハンディについて城北会誌に寄稿したことがあるが、先生は読んで下さったろうか。組合活動についてもクラス会の近況報告では何回もふれたつもりだが、先生とサシでお話しした事がない。いつも一步はなれてクラスメートの肩ごしに、或いはテーブルをはさんで、先生のお元気な姿を拝見し、お声を聞いていただけである。不遜な言い方を許して貰えば、秀才とは何か、出世とは何かと一度議論を吹っかけてみたかった気もする。先生は「笑って答えず」だったろうか。

いつしか我が娘達も、高三、中二、小六となり、いっばしの教師批判、父親批判を展開

する年となり、定年を十年後に控えた自分は当時の先生の年齢に近づきつつある。自分が先生のように子供達や、会社や組合の若い人達にいつまでも思い出されるような良い影響を与えうるだろうか。時代も移り人の心も変わり、情報伝達の手段も一変したから、同じ言葉、同じ方法は無理としても何とか人間としての基本、働く者の権利と義務、働きがい語り伝えたい、若い人達を信頼して育て上げ、後事を託して静かに消えてゆきたいと思っている。

現在の自分の心境、ひそかな決意をのべて先生に対する感謝と追悼の言葉としたい。

## 恩師柴田先生の告別式にて

南 徹

恩師柴田治先生が老衰により他界されたのは六〇年の四月三日であった。城北会から告別式が五日の午後一時、世田谷区経堂三丁目のご自宅で行われる旨の連絡を受ける。

丁度その頃、柴田先生が四中に奉職されて最初に担任された級の生徒で、爾来六〇年間に至極ご懇意な間柄にある下北沢の鈴木信之先輩のご好意で、伊豆の修善寺にある先輩の別荘に二七年卒の白石さん、四一年卒の安藤君と一緒に邪魔して、夜の更けるのも忘れて

興味の尽きない数々の貴重な想い出話を伺い、若かりし頃の、そして我れ我れの教えを受けた当時、そして晩年の先生の警咳にあらためて接した様な気持で東京に帰った矢先の悲しい知らせだった。

当日は雲一つない快晴に恵まれ、先生の旅立ちを祝福している様に明るく暖かな日和だった。脚が多少弱くなられた鈴木先輩をご自宅へ迎えに上り、道順を教えられながら車で式場へ向う。経堂駅の踏切のあたりから、喪服の弔問客の悲痛な面持ちの人々と行き交う。相当手前から車が狭い路上に駐車していて大変な渋滞となっていた。喪章の人に導かれて細い路地に入っていくと、玄関を素通りして広いお庭の左端からぐるっと右に廻って縁側の硝子障子の外された奥の居間に立派な祭壇が設けられていて、左側手前に御遺族の方々が悲しみに耐え忍ぶ御様子で座って居られ無言の返礼を繰り返されていた。

鈴木先輩に続いてお焼香を終ると、先輩は座敷に上って行かれ祭壇の右側の友人の席に坐られた。城北会の野吾さんから、案内役を拝命したので、サザンカと巨大なツツジの木の下に立って、今度は喪主側の挨拶をすることになる。城北会の会長を始めとして役員の方々、戸山高校の校長先生や旧恩師、現役の先生方、そして急を聞いて駆けつけられた数百人もの教え子や知人の方々が、しめやかに合掌し静かに焼香されて名残り惜しそうに先生の遺影を眺め立ち去られて行かれた。

いよいよ出棺の時刻となる。僧侶の経が中断し、お棺が座敷の中央に運ばれ蓋を明け最後のお別れがあわただしく、そしてしのび泣きのうちに過ぎ、外に待つ霊柩車へ担つき運ぶ役目を私も分担し最後から従って進む。

喪主からの挨拶が終り、先生をお運びする霊柩車を先導に何台もの車や小型バスが見送りの方々を乗せて出発して行った。

私もそのあとを追って車で追いかけて代々幡の火葬場の休憩室で時間待ちをされている御遺族の方々に挨拶をして先に失礼した。

改めて先生の慈愛に満ちた御指導を受けられた事への感謝の念を深くし、先生のご冥福とご遺族の方々のご幸福をお祈り申し上げ、菩提寺が入谷の随徳寺とお聞きしているので、いつかお参りに行きたいと思っている。

## 思い出の記

村上章

柴田先生には三年生の僅か一年間担任をして頂いたのであるが、私には柴田先生Ⅱガンマという響きの中に、戸山高校生活の懐かしくもほろ苦い思い出が込められているように

感じられる。先生の授業の厳しさに、私のような数学の不得手な者は、早く時間が過ぎるように、当らないようにと祈る気持でいたことを思い出す。先生の指導方針は徹底的に教科書をマスターすることであった。教科書の予習をして来なかった日には首をすくめ、息を殺す思いであった。しかし、授業をはなれると先生はにこやかで、お話しはシャレがきいていて結構楽しかった。そのような時々、先生は私達に勉強の習慣、正しい生活の習慣を身につけるようにと繰り返し説かれていた。先生が旧四中から戸山高校を通じて、最後のクラス担任をなさったのが私達の三日であったと、後に人にきいたのであるが、先生に僅かな間とはいえ巡り合えたことは大変な幸せであったと思う。既に戸山高校を卒業して三〇年、わが子をはじめ後輩を指導すべき年となりながら、時々柴田先生のあの背筋をぴんと伸ばしたお姿を思い浮べては反省をしているところである。

### 今ひとたびの逢ふこともがな

村上順子

明け方、本当に久し振りに厳しい眼差しをされた先生の夢をみました。何故でしょうか？一昨日は例年通りきちんとお萩を作って、両親達の分と共に先生の分もお供えしてから、

頑張った代食？致しましたのに。そうでした。此れだったのです。先生の追悼文集の件で再三委員の方から督促状を頂いておりましたのを放置したまゝで、その最終期限が明日とということだったのです。

趣味の問題でしょうが私は追悼文なるものを余り好みませんし、生前の状態からは想像もつかない程の美辞麗句の羅列に出合ったりするとぞっとして身震いしてしまう程です。故に、追悼文は書くまいと決めておりましたのに……。このままですと、宿題を忘れた生徒の姿で、或いは解答が分からないで立たされている生徒の姿で自分が出てくる悪夢を再びみ続けることになるかと困りますので、取り急ぎ此の様な妙な書き出しで始まる拙い文を提出することに致します。

柴田先生を私に係わりある人間として意識しましたのは花もはじらう十七才の春でした。(なーんて意味有り気に書きましても皆同類項でしたよね。)あの日、新三年生用の級分け表が古びた木造校舎の窓に張り出されてありました。雀みたいに友人達と群れ乍ら、ある種の期待と不安に心騒がせてA組から順番に眺め進んだものです。氏名をみつけて足踏みした友を一人、二人と置き去りにして尚も進みます。何と何と!!I組にこそふさわしい私がH組に属していたのです。ましてや担任が恐れ多い柴田先生だったのです。H組には当時の親友の名が一人も無くたゞ、「絶望」の一言でした。涙を流したか否かはさだかではあり



ませんが、友の暖かい慰めの言葉は覚えております。(忘れがたいオトメチックな一シーンでした) 何はともあれ藤村先生以上だという風評の「ア」さんが担当された為に、新学期早々に私は重度の数学アレルギー症に罹ってしましまして、授業内容など一切頭脳の方で受けつけない状態になりました。(公(校)害病として認定して頂ければ良かったのでしょね。) 中学時代迄は得意科目であった数学でしたのに、解析の評定は、ネーミングの由来そのままのそれはひどいものでした。自分の不勉強など棚に上げて、恨めしい気持を抱いて卒業致しました。

厳しさの内に秘められている先生の優しさを感じた記憶が在学中に一度ありました。遠足の折乗り物酔いで体調を悪くした私に、さり気なく歩調を合わせて気遣いの言葉をかけて下さり、お陰で無事に登頂出来た時の事です。卒業後数年を経て、松の植え込みのある経堂の屋敷町に友人達と共に先生を訪問させて頂き、着物姿の先生の素顔を拝見しまして『先生も人間だった』との思いを新たにしました。又年に数回ですが、文通をとおして先生のお人柄を次第に理解させて頂けるようになりまして、先生は恐れ多い方ではなくて畏れ多い方なのだとの認識致しました。潜在意識としての強迫観念が消え去ったことに依りまして『柴田先生の授業中』が出てくる悪夢に悩まされることもいつの間になくなっていました。

賀状と暑中見舞とそれに旅先からの絵ハガキ程度の文通でしたが、先生は必ず返信を直ちに書いて下さいました。此の先生との文通をとおしまして、先生の「几帳面さ」と、「礼儀正しさ」と、「尊厳と謙虚さの同居」と、「慈しみの心」等々を、しっかりと学ばせて頂きました。「私もかくありたい!!」と、常日頃心するつもりでおりますが現状はなかなかです。一昨年、先生のご霊前にて奥様から、先生や鈴木元首相がお好きだったという美味しい甘いお菓子をご馳走になり乍ら、HRで私共に訓話なされた内容とは逆に、食べ物の好き嫌いが激しくて野菜など召し上がらなかつたという様な先生のエピソードをお聞きしまして、一層先生が身近かな方として感ぜられました。悲しみの中にもほほえましく心暖まる思いを抱かせて下さった奥様に、改めてお悔みと感謝の気持を伝えさせて頂きまして、ペンを置きます。

## 柴田先生の教育法

山本恒夫

柴田先生の教育法は、第二次大戦後の日本の教育界全体から見ると、平均からシグマ3かガンマ3?位は飛び離れていたように思われる。勿論、それは先生独得のものであり、

唯一無二の教育法だといってしまえばその通りである。先生の教育法を、教室での学習指導の場面とそれ以外の全般的な生活にかかわる生活指導とに分けてみると、学習指導面での教科書を開くのは練習問題を黒板の前に出てやる時だけで、あとはすべて暗記しておく、というやり方は戦後ほとんど行われなくなってしまった。

一方、生活指導の面でいえば、戦後の教育では生活指導の重要性がいわれながら、実際にはどうしてよいかわからず、かけ声倒れに終るものが多かったように思われる。柴田先生のご指導は周知の通り、過去のデータやご自身の体験に裏打ちされた日課づくりに始まり、生活のあらゆる面に及んでいる。これも、その方式の種類は別として、戦後の教育ではあまり行われなかったことである。

こうしてみると、いずれの面でもあまり行われなかったり、行われなくなったことをやってみると、いざの面でもあまり行われなかったり、行われなくなったことになって下さったということになる。その点では、われわれは恵まれていたということになるのではないだろうか。

柴田先生のお姿をはじめてお見かけしたのは、中学の卒業式の時である。実は先生の次男・勇君とは中学が同級で、卒業式には父母代表として柴田先生が謝辞を述べて下さった。中学の数学の先生も鎌田一朗先生といって、四中、物理学校ご出身の柴田先生のお弟子であった。

晩年はわれわれのクラス会というと、家が近い関係で何度かお迎えにあがった。卒業後三十年経っても変らぬ元気なお姿に安心していたら、何もご恩に報いることができないうちに逝かれてしまった。もはやご冥福を祈るばかりである。

## 柴田先生、父そして私

渡辺邦守

柴田先生についてここで披露するような楽しい在学中の思い出、エピソードなどはない。二年生のときに先生の数学の授業に当って初めて先生に接し、一年間「授業が怖い」という思いのみをもって過ごした。もし、あの当時登校拒否が近時のように流行っていたならば、そして私にその勇氣（？）があったならば、登校拒否児ならぬ拒否生徒になっていたであろう。

地獄の責めの一年間が過ぎて三年生となり、あろうことか柴田先生の担任のクラスに自分の名前を見たとき、目の前が真っ暗になり、息が詰まり、喉がからからになった記憶がある。しかも、卒業後「戸山四年生」としてさらに一年間先生のお世話になったのである。このような心理状況の下にあった私にとって先生の人柄を客観的に見られるようになった。

たのは、私が社会人になった後からであろう。「柴田先生」とかけて「するめ」と解く。その心は、「噛めば噛むほど味がある。そして、筋が一本通っている。」というのが、そのころの私の先生観であった。

近ごろ、先生の私らに接する姿勢を思い起こすとき、柴田先生、私の父そして父親としての自分を対比して考えることが多い。

柴田先生の信念は、「努力しなければ報われない」という生活態度を生徒らに徹底的に身につけさせることであつたのではないだろうか。そして、その信念を「自分に厳しく生きる」という姿勢のもとに実行された人だと思ふ。私の父は「物事に誠実に取り組む」、「相手の気持に立ってその人に接する」という姿勢で生きた。そしてその姿勢をもって一貫して私ら子どもに無言の指導をした人だつた。

柴田先生や私の父の生きた時代の背景、その時代の風潮が私らのそれと異なり、それによりそれぞれ生き方に違いがあることは当然であろう。しかし、私が今、父親としてどのような信念あるいは姿勢のもとに自分の子どもらに接しているかを自問自答するとき、胸を張って先生や父の遺影に面することがはばかられる思いがする。「渡辺邦守とかけて蛸と解く」の心境である。

先生がご息らに對しどのような父親であつたかは私は知らない。しかし、先生の私ら

に對するときのゆるぎない自信に満ちた姿は、自分が自分の子どもらに接する姿勢について、改めて「背筋を伸ばして」考え直すきっかけとなつていたのである。

## 先生のショック療法

渡辺彦祐

中学からのつながりで、戸山に入ってからバレーボール部に入って勉強以外は、高校生活を楽しんでいた。

二年の選択では地学を選び、大学は地質学科が良いなと、漠然と進路を定め三年になったら何とかなるだろうという甘い考えで進級した。

ようやく柴田先生のいろいろなお話にも慣れてきた五月末の事、高校生活最後の試合が土曜日午前からあるため、授業を休むので、先生にご承認いただくため届けを持って職員室に入り、おそろおそろハンコを頂きたいのですがと小さい声でお願いした。

前々から準備していた訳でもないとは思ふが、やおら大きな成績表綴りを机の上に広げられ、このような成績で何を言っている、試合には出なくてよろしい。(実際には私が出ない方がチームのレベルが上って勝てるので戦力には関係ないのだが)。丁度良い時だ、

明日お母さんに来るように伝えなさいとのこと。これにはいくらノンビリ屋の私もビックリ、青くなってしまった。

幸い先生のご指示は、大体すべてに亘って成績は悪いが、特に英語が悪い。これの特訓を行うべしとの事。もし心当りがなければ先生を紹介しよう、ということ。某先生をご紹介いただき、入試迄の間面倒を見ていただいた。その結果か（？）、あるいはガンマ先生が出来る、地下資源関係の職につく事が出来た。

先生は大変キビシイ事をおっしゃっていたように思うが、実は出来の悪い生徒一人一人にまで気づくばりされ、暖かい気持で見守っていただいた訳で、卒業後もクラス会で必ず声をかけて頂いた。

現在の私は、あの時のガンと一発のショックのお陰だと心から感謝しております。

## 第五部 柴田 治先生年譜

柴田治先生年譜

本年譜は先生の御長男・柴田武氏の作成になるものです。

明治二十九年四月十九日

(一八九六年)

父・金子親成、母・よ祢の四男（七人兄弟の六番目、兄三人、姉二人、第一人）として、東京市浅草区小島町八番地にて出生。

明治三十六年四月一日（満六才）

(一九〇三年)

東京市浅草区私立三江尋常・高等小学校入学（同校は生家・金子家が経営、校主は金子親成）。

明治四十二年三月三十一日（十二才）

(一九〇九年)

同校高等科二年修了。

同年四月一日

東京開成中学校入学。

大正三年三月三十一日（十七才）

(一九一四年)

同校卒業

大正七年十月（二十二才）

(一九一八年)

小島町内の柴田家へ養子。養父・柴田勝照は実父・金子親成の実弟で柴田家の家督を相続。

大正十一年四月一日（二十五才）

(一九二二年)

東京物理学校高等師範科数学部入学。

大正十二年九月一日（二十七才）

(一九二三年)

関東大震災で罹災。東京市本郷区駒込林町二二三番地へ転居。その後しばらく区画整理委員を務む。

大正十四年三月二十二日（二十八才）

(一九二五年)

東京物理学校高等師範科数学部卒業。

同年四月三十日（二十九才）

東京府立第四中学校嘱託。

同年六月三十日

東京府立第四中学校教諭。

昭和二年五月二十一日（三十一才）

(一九二七年)

白井暉次郎・巽の三女・春子と結婚。

昭和三年五月頃

(一九二八年)

同年十二月十日（三十二才）

長女・京子出生。

昭和七年七月三十日（三十六才）

(一九三二年)

次女・明子出生。

昭和十年二月二十日（三十八才）

(一九三五年)

長男・武出生。

昭和十二年十二月十一日(四十一才)

(一九三七年)

昭和十八年七月一日(四十七才)

(一九四三年)

昭和十九年三月二十五日(四十七才)

(一九四四年)

昭和二十一年八月一日(五十才)

(一九四六年)

昭和二十三年四月一日(五十一才)

(一九四八年)

昭和二十五年一月二十八日(五十三才)

(一九五〇年)

昭和三十六年三月三十一日(六十四才)

(一九六一年)

同年四月

次男・勇出生。

(東京都制実施により東京府立第四中学校は東京都立第四中学校と改称。)

東京都世田谷区経堂町三八四番地へ転居。

昭和二十一年度教科書編集委員(文部省)。

(新学制により東京都立第四中学校は東京都立第四高等学校となる。)

(東京都立第四高等学校は東京都立戸山高等学校と改称。)

東京都立戸山高等学校退職。

武蔵工業大学付属高等学校教諭。

昭和五十二年四月(八十才)

(一九七七年)

昭和五十六年三月(八十四才)

(一九八一年)

昭和六十年四月三日

(一九八五年)

同校非常勤講師。

同校退職。

老衰のため死去。(八十八才十一ヶ月)

## 資料・録音テープ一覧

柴田治先生講演等録音テープ一覧（柴田家蔵）

- 一、昭和三十五年十月二十二日、「戸山高二C（武藤先生）父兄会にて」
- 二、同三十六年三月二十八日、「卒講送別会」（高田馬場、大東京）」
- 三、同三十六年六月十八日、「PTA感謝の会」
- 四、同三十六年十月九日、「目黒区立東山中学校PTA」
- 五、同三十七年六月二十二日、「戸山高三年生（岩切・和田先生）」
- 六、同三十七年七月十四日、「戸山三F（福島先生）父兄と生徒」
- 七、同三十九年六月二十七日、「武蔵工大付属高校一年生父兄会」
- 八、同三十九年八月二十二日、「目黒区立東山中学校PTA」
- 九、同四十年五月十一日、「戸山三G（福島先生）父兄と生徒」
- 十、同四十二年四月十五日、「古稀を祝う集い」（昭四卒、昭九卒合同）
- 十一、同四十二年六月十二日、「一ツ橋高校生徒、卒業生、職員に対する講演」
- 十二、同四十六年十一月十三日、「都立北高校PTA」
- 十三、同四十八年十一月十七日、「忍岡高校にて」

## 編集後記

はしがきにも記したように、故柴田先生の追悼文集を作ろうという話が出たのは、昭和六十年六月一日に開かれた戸山高昭和三十一年卒日組クラス会の席上であった。直ちに編集委員会が作られたが、実際に編集の作業にかかったのは、昭和六十一年五月である。この年、五月二日に日組クラス会の準備会があった。そこで、先生の記録を中心にわれわれの思い出もあわせ収めるのはどうだろうか、という話を持ち出したところ、出席の面々も賛成してくれたので、これなら大丈夫と動き出した次第である。

正式に第一回の編集委員会を開いたのが五月二十九日であった。その後、九月六日、昭和六十二年二月十三日、三月二十四日、五月八日……と編集委員会を開き、相談を重ねた。その間、皆に思い出の記を書いてもらったり、また、他クラスの人にも書いてもらってはどうかという声が出たので、「城北会誌」で呼びかけたりもした。そのおかげで、他クラスからも追悼文をいただけたのはありがたかった。

このような形で何とか先生の生涯やお言葉をまとめることが出来たのは、まったく御遺族の皆様のおかげである。先生が永遠の眠りについてからまだ日も浅いため、ご迷惑ではないかとためらいながら何度かお宅へお伺いした。もし奥様をはじめ、ご子息・武氏・勇

氏のご協力がなかったら、これは実現しなかったにちがいない。特に、奥様から「憶い出すままに」をいただいた時は感激した。実はそれがまだゲラ刷りの段階の時に、勇氏が見せて下さった。それ以来、何とかここに収めさせていただきたいものとお願ひしていたのである。

編集委員はいろいろな方面の者が集まったので、役割分担で作業が集められた。城北会や先輩諸氏とのパイプ役は尾崎君、編集委員会の場所は弁護士・渡辺（邦守）君の事務所、会計は銀行関係の比田君、録音テープのダビングは放送関係の木村（佐知子）さん、広告関係の丸尾君は全体の目くばり、といった具合である。先生の生涯と語録は山本が担当した。したがって、柴田先生流に言えば、まずいところが出てくるということの責任は一切山本にある。

また、平塚裕康君が録音機のことをいろいろ心配してくれたのをはじめとし、多くの方がご協力下さった。この場を借りて、改めてお礼申し上げたいと思う。（山本記）

我々のクラス会は柴田先生を囲んで、毎回世話役が変りながらも、毎年一回必ず続けられて来た。

会の最初に先生のお話を伺っていると不思議に我々は高校時代の自分に戻ってしまうようであった。五十八年か五十九年のクラス会であったか、高校時代の柴田先生の話された内容とか先生とのやりとり等の話になってしまい、出席メンバーのほぼ全員が先生について語ったことがあった。先生はいつものようにニコニコと我々の話を聞いて下さった。皆の話が一つ一つ面白く、新鮮に感じたことを思い出した。こんなこともあって、この企画が生れたのだと思っている。（尾崎記）

編集委員とは名ばかりで、山本委員長以下の方々のお世話になりっ放しであった。役得で皆さんの文章を先に見て、その上をゆくものを書いてやろうと成績主義丸出しのもくろみだったが、校正時まで全く見るひまもなく、第一自分の原稿すら、何度も締切りをのぼして貰って印刷所を待たしての滑り込みである。

ここでもまた、遅刻癖が直っていないのがばれた。努力をしないで目標ばかり高い自信過剰の僕のような男を暖かく包み、時に皮肉な目つき放して下さったことを思い出す。これを機に、「早起きをしてお茶を一杯、静かに頂く、それから丸善に原書を買いに」行こうかな。（丸尾記）



山本恒夫君のリードのもと、五回余りにわたり編集会議を開き、よ・う・や・く・こ・の・よ・う・な・小誌ができてあがりました。「ようやく」などというのは実はおこがましい限りで、私のやったことはほとんどなく、たまたまJRの駅に近いということで私の事務所を編集会議の場に使っていただいたことが私の協力の全てでした。

先生の遺族の方への依頼、打ち合わせ、録音テープからの反訳から編集会議の開催通知、会議の段どりまで一手に引き受け、こゝまでこぎつけられた山本君のお力に対し心から敬意を表する次第です。(渡辺邦守記)

東京都立戸山高等学校昭和三十一年卒業H組

「柴田治先生——生涯・語録・思い出——」編集委員会

尾崎英二  
木村佐知子  
比田宏  
丸尾典正  
○山本恒夫  
渡辺邦守  
(○印委員長)

柴田治先生——生涯・語録・思い出——

昭和62年9月5日発行

編集者 「柴田治先生——生涯・語録・思い出——」編集委員会

発行者 東京都立戸山高等学校昭和31年卒業H組

印刷所 有誠文社印刷所